國文選

卷七

4a
810
B85

41822

教科書文庫

4
810
41-1930
20000
67115

資料室

昭和五年十一月二十八日
文部省檢定濟
中學校國語科用

國文選

東京高等師範學校教授
垣内松三編

広島大学
教
67115
図書

42
810
B35

一　縱に學年を貫き横に學期に亙りて特に全篇の組織に留意せり。

一　文化と國語との關係を基本として國民精神の涵養を意圖せり。

一　教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。

一　原作の更改は教科書としての用意に出づ原作家の諒恕を乞ふ。

目次

一　昭代の餘惠……笹川臨風……四
二　國民文化の理想……清原貞雄……一一
三　國語の愛護……五十嵐力……二四
四　牧歌的精神……和辻哲郎……三一
五　雄大な氣魄……伊東忠太……四一
六　日本武尊……（古事記）……四八
七　入鹿の父……岡本綺堂……五六
八　純ぶる心……佐佐木信綱……八〇
九　大和國原……武田祐吉……九三
一〇　正倉院拜觀記……藤代禎輔……一〇一
一一　法隆寺……高濱虛子……一〇七
一二　聖德太子……島地大等……一一一
一三　中道を歩む心……鶴見祐輔……一一九
一四　西の京……田山花袋……一二七
一五　平安城……藤岡作太郎……一三四
一六　二つの典型……尾上柴舟……一四八
附錄　國文學形態史圖表
國文學年表　上

一　昭代の餘惠

昭代の餘惠は遐邇に普くして、庠序設立の盛況、實に千古に空し。獨り小學校の僻陬にも遍きのみならず、輓近、中等・高等の黌舍到る處に設けられて、一縣の中概ね十を以て數ふべし。圖籍の刊行も亦歲と與に盛んにして、汗牛充棟、書架に溢れて滿々たり。巍然たるその黌舍、教師その人に乏しからず。載籍・機器より遊戲の具に至るまで、擧げて備らざるはなし。曾ては古人これを門外不出と標榜し、什襲珍藏して措かざりし圖籍も、今は僅に幾十錢を投ずれば輙ち手にすべし。盛んなるかな文運の發展したるや。今の學徒にして文教興隆の恩澤に浴するものは、宜しく古人修學の難を顧みて大いに奮起すべきなり。〔第一段〕

參考資料

日本教育史（文部省）

螢を盛りて書を照らし、經を帶びて耕耡す。古人好學の意洵に尙むべし。夏禹の寸陰を惜しめる、王通の六歲衣を解かざる、後人聽いて以て起つべきなり。應神天皇の朝、典籍始めて扶桑に入りてより、文教漸く興起し、厩戸皇子の博識、弘文天皇の好學、時にこれありといへども、修學の徒もとより萬に一なし。大寶の令、大學・國學の設ありといへども、廣く下民に及ぶ能はず。朝廷、圖書寮の建置ありといへども、藏する所は謄寫の書のみ。太宰府の學校、管する所六國なりしも、藏する所は奈良朝に至るまで僅に五經に過ぎざりきといふ。博士官の書閣は卽ちこれ石室金匱、容易く他の窺ふを許さず。これ菅・江二家の世業たりし所以なり。石上宅嗣、家に藏書館の設ありきといへども、一家の束觀のみ、祕閣のみ。書を獲るの難き、豈少々ならんや。〔第二段〕

螢を云々　蒙求に「晉車胤家貧、不常得油。夏月則練囊盛數十螢火、以照書、以夜繼日焉」

經を帶び云々　蒙求に「魏常林性好學。漢末爲諸生、帶經耕鋤」

夏禹の云々　小學に「大禹聖人、乃惜寸陰。至於衆人、當惜分陰。豈可佚遊荒廢、生無益於時、死無聞於後」

王通云々　王通は隋の人。少くして學に志し、四方に遊學して衣を解かざること六年に及べりと。

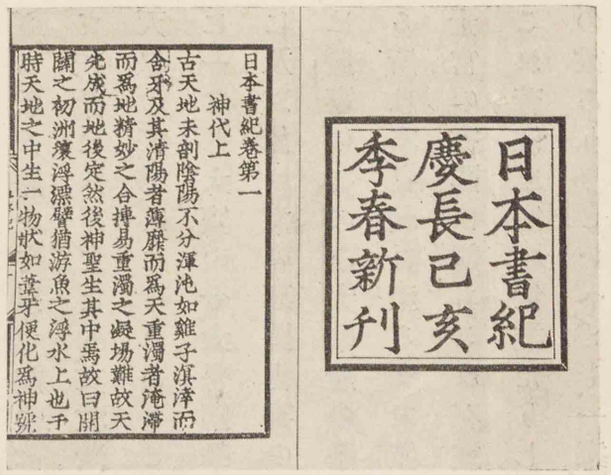
大寶の令　文武天皇、刑部親王・藤原不比等等に勅して律令を撰ばしむ、大寶元（一三六一）年成る。律六卷・令十一卷あり。

五經　易經・書經・詩經・春秋・禮記。

菅・江　菅原・大江の二氏。

石上宅嗣　奈良朝時代の學者。天應元（一四四一）年歿す。年五十三。

○夫れ我が國印刷の古きは、稱德天皇の神護景雲四年に造る所の百萬塔中の陀羅尼經を推すべし。されど圖籍の刊行は容易の業にあらずして、多くは筆寫を以て傳へたり。



慶長勅版日本書紀

室町幕府の末、三條西實隆は手づから史記を寫し、又子弟に課して經書・史記・漢書等を謄寫せしめきといふ。かの一字版の輸來に至つては、實に文祿の役以後にかゝる。文祿二年、勅命により新來の術を以て古文孝經刊せられ、同五年、小瀨甫庵は、補註蒙求を刊せり。ついで慶長年間に、日本書紀・

陀羅尼經　呪語の經。孝謙上皇は、惠美押勝の亂鎭定せしを以て、弘願のために之を印刷して百萬の小木塔に籠めて、奈良の七大寺、浪花の四天王寺、江州の崇德寺、大和の弘福寺に納め給ふ。これ世界最古の印刷物なり。

三條西實隆　後土御門・柏原の兩朝に仕へて內大臣に至る。和歌・連歌に秀で、故實に通ず。天文六（一一九七）年薨ず。年八十三。

史記　百三十卷。司馬遷の著。紀傳體の支那歷史。

漢書　百二十卷。班固の著。漢代の歷史。

一字版　木版活字をいふ。文祿の役に朝鮮より輸入せり。これより印刷術著しく進めり。

文祿二年　後陽成天皇の御宇。（一二五二年）

古文孝經　二十二章。魯の恭王の時、孔子の舊宅の壁中より得たりといふ。

小瀨甫庵　名は道喜。儒者。

四書等の勅版あり。又好學の將軍家康ありて、孔子家語・吾妻鑑等の印行あり。本阿彌光悅の如きはその獨創によりて、謠本その他を刊行せり。ついで元和元年には銅版活字の大藏一覽刊せらる。これより後、彬々たる文運頓に開け、侯伯の家も亦大部の舶載書籍を刊し、文學旺然として覽るべし。然れども、固より今の活字印行の易きには比すべくもあらざりき。

師を得てこれに就くの道も亦實に難かりき。吉野朝の頃、筑紫の人、千里を遠しとせずして常陸國に來り、四書・五經の講筵に侍す。その孟子を聽くや、豆三斗、日に一握を糧とす。既にして易經に及んで糧悉く盡く。乃ち鄕に歸り、更に資を得て又聽講を紹ぎきといふ。野の足利學校は室町季世に於ける文學の一穗燈なり。遊び學ぶもの四國・九州を遠しとせず。

豐臣秀次・前田利家など に仕ふ。寬永七（一二九〇）年歿す。年七十七。

蒙求　三卷。李瀚の著。

慶長　後陽成天皇の御宇。（一二五六年）

日本書紀　七九頁參照。

四書　大學・中庸・論語・孟子。

孔子家語　十卷。著者未詳。

吾妻鑑　五十一卷。鎌倉幕府の記錄。

本阿彌光悅　書・畫・瓷器の陶技・蒔繪・茶道等の諸道に通ず。寬永十四（一二九七）年歿す。年八十一。その印行のものには謠本百番の他に、方丈記・久世舞・百人一首・歌仙等あり。

元和元年　後水尾天皇の御宇。（一二七五年）

大藏一覽　十一卷。佛教の書。

吉野朝の頃云々　五山の僧の手に成れる「碧山日錄」に記す所なり。

孟子　七卷。孟軻の著。

野の足利學校　栃木縣足利市にありき。

薄暮、聖像の前に踞して、學徒の文を講ずる狀、心ある行旅をして崇敬の思あらしめきとぞ。

江村專齋の老人雜話に記す所によれば、彼が少年の時、洛中に四書の訓讀を教ふる人なし。漸く索めて山科卿に從ひしが、孟子に至りて乃ち辭を他に藉りて又教へざりしも、實は知らざりしなりといふ。然れども、かゝる世にも惺窩は宋學を唱へ、羅山は力學して幕府の叔孫通となれり。羅山の棠陰比事の質疑に答へて祇園の祭を觀ざりしが如き、除夜に通鑑綱目を講じて諄々たりしが如きは、俱に傳へて後代の美談となす。

蘭學の始めて傳はれるや、これを講ずる徒、苦辛備さに至れり。良澤・甫周・玄白の解體新書を譯する、實に稿を改むること十一、年を經ること前後四なりきと云ふ。維新の前後、四方

江村專齋　儒者・醫師。寛文四(一三二四)年歿す。年一百。
惺窩　藤原氏。儒者。元和元(一二一七五)年歿す。宋學　宋代の學者の說ける性理學・程朱學・朱子學等をいふ。
羅山　林氏。幕府の儒官。惺窩の門人。明曆三(一三一七)年歿す。年七十五。
叔孫通　漢の學者。高祖に說いて朝儀を起さしむ。
棠陰比事　五卷。宋の桂萬榮の著。
通鑑綱目　五十九卷。宋の朱熹の著。
祇園の祭　京都八坂神社の祭禮。昔は六月七日に行へり。
良澤　前野氏。蘭醫。享和三(一二四六三)年歿す。年八十一。
甫周　桂川氏。蘭醫。文化

の文明を輸來せんとするものの、概ね困學して而して後始めて曙光を認むるに至りたる辛酸の迹は、今日の人をして容易に外書を講じ外學を學ぶを得しめたるなり。

保己一檢校、垂髫明を喪ひ、而して苦學し、人に絕したる精力を以て和學講談所に長となり、一千二百七十三部の羣書類從、二千一百三部の續羣書類從を編して、後生その裨補を得ること甚だ多し。左丘明、瞽となりて左傳を著し、司馬遷、刑せられて史記を作る。古人奮勵の迹、以て少年立志の基となすに足れり。

獨のグーテンベルヒ一たび金屬活字を發明して、歐洲の文明斐然章をなし、明治の世に本木昌造これを傳へて、方今その恩に浴す。書あり累々として泰嶽に及ぶ。然るに獨り怪しむ、今の學徒何が故に逡巡して而して放逸に奔らんとは

六(二四六九)年歿す。年五十九。
玄白　杉田氏。蘭醫。文化十四(一四七七)年歿す。年八十五。
解體新書　西洋解剖書。蘭譯の最初のもの。原書は蘭醫キユルムスの著。
保己一　塙氏。國學者。文政四(一四八一)年歿す。年七十六。
和學講談所　寛政五年保己一の創設せし學舍。江戸の番町にありき。
左丘明　周代の人。孔子の著なる春秋の傳を著す。之を春秋左氏傳と呼び、略して左傳と稱す。
司馬遷　西漢の人。史筆に長ず。
グーテンベルヒ　活版印刷術の發明者。Johannes Gutenberg(一三九四—一四六八年)
本木昌造　我が國活字製造の祖。長崎の人。明治八年歿す。年五十三。

する。

語を學生諸子に寄す。書あり、師あり、學の成ること極めて易し。逡巡する勿れ、放逸に奔る勿れ。宜しく古人力學の迹に鑑みて一向專念すべきなり。（笹川臨風―「男性美」による）

飛驛たくみほめてつくれる眞木柱たてし心は動かざらまし（賀茂眞淵）

更けてゆくも知らでふみ見るよるゝは寢ぬに驚く曉の鐘（本居宣長）

何ごともこのころにはと思ひつる三十の年の果ぞかなしき（香川景樹）

しぶ〳〵に馬鍬引く小田の特牛うたれぬ先に歩めと思へど（大隈言道）

かくばかり磨けば清き玉なるをいかで塵には委せたりけむ（大國隆正）

笹川臨風　文學博士。明治三年東京市に生まる。東京帝國大學國史科出身。東洋大學教授。

賀茂眞淵　八〇頁參照。

本居宣長　四〇頁參照。

香川景樹　歌人。桂園と號す。鳥取の人。香川景柄の養子となる。天保十四（一五〇三）年歿す。年七十六。

大隈言道　歌人。福岡の人。慶應四（一五二八）年歿す。年七十一。

大國隆正　二二頁參照。

二　國民文化の理想

國家に理想なき時は、その國家は政治的にも文化的にも發展しない。國家の發展は、その國家の理想に依つて或は右に延び或は左に進む。國家の理想が宏遠であれば、その政治的發展も文化的發展も亦宏遠であり、國家の理想が高尚であれば、隨つてその政治も文化も高尚なる發展を遂ぐべきは理の當然である。

我が國家の理想は實に建國の當時既に定まつてゐて、爾來三千年、我が國民的活動の基準となり、國民文化發展の基礎となつたのである。卽ち天壤無窮の神勅がこれである。天照大神が、皇孫瓊々杵尊をして葦原中津國を治めしめ給はんとして三種の神器を授け給うた時、

［參考資料］
小泉八雲「神國日本」
清原貞雄「日本國民思想史」

葦原中津國　我が國の別稱。

豐葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地也。宜爾皇孫就而治。行矣。寶祚之隆、當與天壤無窮者矣。

と仰せられて、その前途を祝福せられたこの神勅こそ、實に我が國永遠の國是であり、理想である。

「千五百秋之瑞穗國。」と仰せられたことは、農を以て國本となすべきを定められたものであり、「是吾子孫可王之地也。」と仰せられたのは、實に我が國體の根本義たる皇統萬世一系の基本を定められたものである。爾來君位は連綿として一系にして、未だ奕世革命のことなき世界無二の一大事實を產んだのである。又、「爾皇孫就而治。」とは既に幾多の學者が論じ盡くしたやうに、我が國の政治的理想をいつたもので、歷代の天皇が國民を治め給ふに、覇道を斥けて常に王道を行はせられ、終始仁政を以て一貫せられたのは、この「しらす」の

豐葦原千五百秋云々　日本書紀卷十七に出づ。

しらす　仁德を以て統治すること。

政治を理想とせられた天照大神の遺教に據られたものである。古語には「しらす」と「うしはく」とが嚴密に區別して用ひられ、天皇の政事には必ず「しらす」と云ひ、決して「うしはく」とは云はなかつた。この仁政主義こそ實に我が國家の理想とする所である。「寶祚之隆當與天壤無窮者矣。」とは、天照大神の直系の御子孫が仁政を以て君臨し給ふに於ては、御代萬々歲、天地のあらん限り無窮なるべきを豫言せられたものである。天地のあらん限り、無窮にいや榮えて行くことは、啻に天津日嗣のみではない。この天津日嗣を翼賛し奉る大御寶も、天津日嗣と大御寶とを以て成立して居る我が皇御國も、共に天地のあらん限りいや榮えて行くことが、我が皇祖天照大神の大理想であり、又その理想が着々として實現せられて來たのである。

うしはく　武力を以て征服すること。

大御寶　臣民。天皇の御寶として愛護せらるゝ意。

建國の當初、僅に中部日本の一部をその勢力範圍として居つた大和朝廷は、八十綱うち掛けて引寄することの如く、漸次その勢力を擴張して、遂に大八洲國を完全に治らし、更に一度は大陸の一部にまでも歩武を進めたのであるが、時未だ熟せず、一旦得たその地歩を放棄して、永い雌伏の時代を經なければならなかつた。併し明治になつて王政復古し、再び古の盛時を見るに及んで、この發展主義の理想は次第に實現せられて來た。否、それよりも一層著しく八十綱うち掛けて引寄することの如く綱羅して來たのは世界の文化である。東洋文化は、儒教・佛教は勿論、文藝・美術・學術に至るまで、一として我が國に輸入せられないものはなく、悉く我が藥籠中のものとなつて、その本來のものよりも一層の發達を遂げたのである。西洋の或學者は、「東洋の文化を研究せん

一度は大陸の云々　崇神天皇の朝に、任那の請により新羅を征し、垂仁天皇の朝に任那に日本府を設けて之を統治す。紀元八六〇年には神功皇后新羅を征し、威令大いに行はる。欽明天皇の御代に及び、任那は滅び日本府も毀たる。

儒教　孔子・孟子の說を奉じ、四書・五經等を經典とする敎。政敎の一致を主義とす。

と欲するものは、先づ日本の文化史を繙け。日本には東洋文化の全部が縮圖せられて居る。」と云つてゐる。明治以後に於ては、更に泰西の文化を輸入して、東西文化の融合を圖り、こに渾然たる世界文化を集大成せんとしてゐる。これ實に天照大神の理想に基づき、皇大神の寄さしを信條とする我が國民の自信力によるものである。かくの如くにして三千年を經來つた今日の我が國民は、この大理想を益〻發展せしむることに餘念ないのである。

この大理想の實現に最も肝要なのは國民精神の磅礴たることである。國民精神とは國家我の精神、卽ち自國に對する自覺の精神である。自國の尊重すべき所以を知り、自國の長所と短所とを意識し、その長所を培養し短所を補足して、益〻國家の發展を期し、自國を不羈獨立たらしむる所の愛國

寄さし　寄すの敬語。任務を授け給ふこと。

心が、卽ちこの國民精神である。國民精神の磅礴たる所に一國獨立の文化が始めて成立するのである。假令その要素を外來文化に假らうとも、この精神の健在なる限は、その要素は國民的に陶冶せられて、立派な國民文化の華を咲かせるのである。若し外來文化を假用するに當つて、毅然たる國民精神が存在しないならば、それはたゞ一つの模倣文化に過ぎないであらう。

我が國には、古來この國民精神が旺盛であつたために、その文化の要素を大部分外國に仰いだにも拘らず、よく日本文化と稱して恥づかしからぬものを大成したのである。

この我が國民の國民的自覺は、神國思想を以て常にその基調となして居る。我が國を開闢せられたのが我が皇室の祖先たる神々であると云ふことは、やがてその後裔である

天皇をそのまゝ神であるとする信念を產んだのである。柿本人麿は、

大君は神にしませば天雲のいかづちの上に廬せるかも

と詠じた。この大君は神にましますと云ふ一句が全くその當時の思想を現したもので、天皇を現人神と稱へた例は、歷代の詔勅の中に、多く明神と稱へ奉つて居ることに依つても明かである。

日本だけが特に神に依つて開闢せられた國であるか、又日本のみが特に神の恩惠を受けて居る國であるか否かといふことを、今論ぜんとするのでは無いが、斯くの如き信念を國民が抱いて居つたのは、自國我と云ふものに對する自信を高める點に於て極めて有力であつたのである。

柿本人麿　八一頁參照。
詔勅の中に云々　一例として文武天皇御卽位の宣命の一部を引く。
「高天原に事始めて、遠天皇祖の御世々々、中、今に至るまでに、天皇が御子のあれまさむいや繼ぎ繼ぎに、大八島國知らさむついでと、天つ神の御子ながらも、天にます神の依さし奉りしまにまに、聞こしめしくるこの天津日嗣高御座の業と、現つ御神と大八島國知ろしめす倭根子天皇命の授け給ひ負せ給ふ、貴き高き廣き厚き大命を、受けたまはり恐みまして、この食國天の下を調へ給ひ平げ給ひ、天の下の公民を惠み給ひ撫で給はむとなも、神ながら思ほしめさくと詔り給ふ天皇が大命を、諸聞こし食さへと詔る。」（續日本紀）

蒙古襲來　（蒙古襲來繪詞）

日本書紀に新羅王の言として、「東に神國あり、日本と云ふ。」といふ語があり、三代實錄に、「日本朝は所謂神明の國なり。」とあるのを見れば、少くともこれ等の書の編纂せられた頃には、既に日本は神國であると云ふ命題が成立して居つたことは明かである。然し奈良朝から平安朝の初期までは支那崇拜の思想が最も盛んであつたので、自然國民的自主精神も神國思想も衰へてゐたが、その末期になると、日本文化が勃興するに伴なうて國民的自主精神も神國思想も漸く強調せられて來た。卽ちこの頃から鎌倉時代にかけては、我が國が神國であると云ふ思想を現した言葉が諸書に現れて居る。殊にその高潮に達したのが文永・弘安の國難に際會した時である。その時鎌倉の當局者が敢然として蒙古の通牒を一蹴し得たのは、この時代の華とも云ふべき武士道の賜

日本書紀　七九頁參照。東に神國云々　日本書紀神功皇后九年十月の條に出づ。

三代實錄　五十卷。六國史の一。延喜元（一五六一）年藤原時平・大藏善行等の撰上せるもの。淸和・陽成・光孝の三天皇の御代の實錄なり。

日本朝云々　三代實錄貞觀十一年の條に出づ。

命題　判斷を言語にて表はせるもの。英語のProposition の譯。

諸書　大神宮諸雜事記・東大寺要錄・小右記・平戸記・源平盛衰記・吾妻鏡・玉藻などを指す。

文永・弘安　文永は龜山天皇の御世、弘安は後宇多天皇の御世。共に元兵の我が國に寇したる時なり。

でもあつたらうが、又一つは神國思想と相伴なうて居つた國民精神の磅礴たるものがあつたからであらう。增鏡に、この蒙古襲來とその結果とを記して、「なほ吾が國に神のおはしますことあらたに侍りけるにこそ。」と結んで居るのも、當時の國民精神と神國思想との關係を示したものである。

この時代に於て僧日蓮などが神國思想を盛んに强調して居るのも、やはり時代の反映である。その外睿尊や師錬等も、何れも僧侶の身でありながら、我が國が神の末葉であることを說いて居る。況や度會家行等が神祇開闢說を主張して居るが如きは當然のことである。就中この思想を高唱したものは北畠親房であつて、その著「神皇正統記」の劈頭に、「大日本は神國なり。」と喝破して居る。

室町時代は、大義名分が甚しく廢れて國民精神の衰へた

增鏡　十卷。後鳥羽天皇より後醍醐天皇に至る約百五十年間の史實を記せり。卷九「新島守」參照。

日蓮　法華宗の開祖。貫名重忠の子。安房の人。文應元年安國論を著し、諸宗を誹謗して伊豆に流さる。後赦されしが、又幽せられ、文永八年佐渡に流さる。赦に遇ひて甲斐國に身延山を開く。弘安五(一九四二)年池上に寂す。年六十。

睿尊　南都西大寺の僧。正應二(一九四九)年寂す。年九十。

師錬　京都の人。圓通寺・三聖寺・東福寺などに住し、正平十九(二〇二四)年寂す。年六十九。元亨年間に、元亨釋書を著して後醍醐天皇に奉る。

度會家行　伊勢外宮の神

時代であるが、前代を受けて國家我の意識は高まつてゐたので、佛を本とし神を末とする本地垂迹說に對しても、神を本とし却つて佛・儒を末とした說が主張せられた。

桃山時代は、豪快濶達な豐太閤の宏圖に依つて國民的意氣の最も昂揚した時代で、神國思想も亦頗る强調せられて居た。秀吉・家康の書にも屢〻神國の語が認められる。

德川時代は儒學全盛の世であつたから、儒者の中には儒教を尙び、支那そのものを尊崇するの餘り、往々國民的自主精神を沒却したものが出づることを免れなかつたが、同じ儒者でも大いに國民精神を發揮して、堂々とそれ等の腐儒輩に對抗したものも、固より少くは無かつた。

山崎闇齋は朱子學の碩學として門戸を張り、兼ねて所謂垂加神道を首唱した人で、熱心な日本主義の尊奉者として

官。元應二(一九八〇)年、類聚神祇本源を撰す。又和歌をよくし風雅和歌集の作者。

北畠親房　吉野朝廷の重臣。准三宮に進む。正平九(二〇一四)年薨ず。年六十三。

神皇正統記　六卷。北畠親房の著。神代より後村上天皇の御卽位までの歷史。

本地垂迹　僧行基始めてこの說を唱へ、佛敎弘通の手段とせり。卽ち天照大神を大日如來の垂迹なりとせり。この說より兩部神道を生ぜしが、明治に至り神佛分離するに及びて全く衰へたり。

秀吉・家康の書に云々　豐臣秀吉が天正十九年七月二十五日附を以て印度副王に與へし書に「夫我朝者神國也」とあり。德川家康が慶長十七年六月、ノビスパンヤ國主に與へし答書に「抑吾邦者神國也」とあり。又翌十八年十二月に發せし耶蘇敎禁

他の不見識なる儒者輩に對抗したことは、匿れも無い事實である。その流を汲む學者に多くの國體論者を出した。それ等の人々の立論は何れも神國觀に基づいたものであつた。

水戸學は我が國に於ける國體論の最高峰であつて、儒學と國史の精神とを打つて一丸としたともいふべきものであるが、その國體論を根據とし、國民精神を强調した點に於ては、著しい功績があつた。

儒者の支那崇拜、尊外卑內の陋習に反抗して大いに自國尊重の精神を發揚した點に於て、復古國學者も水戸學者に比肩すべきものである。外來思想の侵犯を受けない前の古神道を宇內最貴の道とする所の國學者が、神國思想を高調して居ることは云ふまでもないが、就中、最も熱烈に日本主義を主張したのは平田篤胤である。その論旨は、今日から見

制の文に「夫日本者元是神國也」とあり。

山崎闇齋　京都の儒者。初め佛に入りしが後髮を蓄へて儒となり、朱子學を奉じ、又神道を唱ふ。之を世に垂加神道といふ。垂加はその號なり。天和二(一六八二)年歿す。年六十五。

朱子學　宋の朱熹の唱へし經學。

其の流を汲む云々　保科正之・淺見絅齋・若林强齋・三宅觀瀾等を指す。

水戸學　水戸藩にて興隆せし學派。國學・史學・神道を經とし、儒學を緯とせり。德川光圀の大日本史編修に基づき、大義名分を明かにするを本領とす。

復古國學者　賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤・矢野玄道・大國隆正等を指す。

平田篤胤　秋田の人。本姓大和田、平田篤穩の養子となる。天保十四(一八四三)年歿す。年六十八。

れば多くの批評を免れないにしても、その磅礴たる國民精神に於ては大いに壯としなければならない。

明治維新以後、何事も泰西に範を取つて殆ど國家我の精神を危からしめんとした際に、朝廷の要路に立つて神武の丕圖に復古し、神祇官の復活をさへ實現せしめたものは、篤胤の高弟矢野玄道・大國隆正等であつた。その後所謂西洋心醉時代を出現して、殆ど國民文化の獨立を失はんとした際に、起つて反動運動を起し、遂に國粹論の勃興を喚起したのも、亦これ等の先哲の氣魄を承けて、國民精神に燃ゆる人々であつた。

これまで幾度か國歩多難の際に會する度毎に、神明の佑助を信ずる國民の強い自信力に依つてこれを切拔け、着々として建國の理想を實現して來た我が國民は、現在に於ける國歩の多難、及び將來も豫期せねばならぬ幾多の國難を、國民の傳統的精神と、それから生ずる強い自信力とを以て切拔けて、政治的にも文化的にも益〻その發展を遂げて行かなければならない。（清原貞雄―「神道と日本文化」による）

鉾とりて守れものゝふこゝのへの御階のさくら風そよぐなり（孝明天皇）

大君にさゝげまつりし我がいのち今こそすつる時は來にけれ（平野國臣）

君が代をおもふ心のひとすぢに我が身ありとは思はざりけり（梅田雲濱）

大君のためには何かをしからむ薩摩のせとに身はしづむとも（僧月照）

いくそたびかき濁してもすみかへる水やみ國の姿なるらむ（八田知紀）

清原貞雄　史學者。文學博士。大分縣の人。京都帝國大學國史科出身。廣島文理科大學教授。

神祇官　祭祀を掌り、神職を總轄せし官廳。古は太政官と並び、明治維新には七官の一たり。

矢野玄道　國學者。伊豫の人。明治二十年歿す。年六十五。

大國隆正　國學者。石見國津和野藩士。初め野々口氏と稱し、後大國に改む。明治四年歿す。年八十。

國民精神に燃ゆる人々　加藤弘之・西村茂樹・杉浦重剛等を指す。

三 國語の愛護

祈年祭の祝詞は、延喜式の中に跡を留めた三十篇足らずの古祝詞の中、最も名高いものの一つで、多くの學者から日本民族本來の使命・抱負を道破した大文章と視られて居り、或少數の熱心家からは、東西古今に通じて天地間第一の文章とも視られて居るものである。

それは伊勢に坐す天照大御神の神德を稱へて年穀の豐熟を祈つたものであるが、いかにも蒼古素樸な言句の中に宏遠雄大、正々堂々たる抱負をいひ現したもので、これを國民永久の理想とするに異論はなく、また古來の國學者の與へた解釋にも、大體に於て異論はない。併したゞ一つ私の不審に思つて居るのは、「青海原は棹柁干さず。」から「長道間なく立て續けて。」までの數句の意義をば、朝貢の船舶・駄馬の連續することと取るべきか、或は皇化を普及し、民禍を刈除し、理想を弘布する我が宣傳使の海陸兩路に於ける行列と見るべきかといふ點である。

私かに思ふに、これは朝貢の船や馬が遠近の領國から來ることではなくして、多分皇化宣傳使が勢揃ひして出かけて行くことであらう。向から來るのではなくして此方から往くのであればこそ、「船の艫の至り留る極み、馬の爪の至り留る限り。」とは云つたのであらう。「陸より來る道。」と云はずして、「陸より往く道。」と云つたのであらう。又船を滿て續け、馬を立て續けて、峽き國を廣くし、峻しき國を平かにすといひ續ける以上は、どうしても一種の理想を持つ團體の積極的遠征を意味すべき筈で、小弱國が叩頭して强大國の主權者に

參考資料

祝詞 神前にて朗讀する祭文。年を經るに從つて形式一定せり。延喜式には（祈年祭・春日祭・廣瀨大忌祭・龍田風神祭・平野祭・久度古開・六月月次・大殿祭・御門祭・六月晦日大祓・東文忌寸部獻横刀時呪・鎭火祭・道饗祭・大嘗祭・鎭御魂齋戸祭・伊勢大神宮・豐受祭・四月神衣祭・六月月次祭・九月神嘗祭・豐受宮同祭・同神嘗祭・齋內親王奉入時詞・遷奉大神宮祝詞・遷却崇神詞・遣唐使時奉幣・出雲國造神賀詞）を收む。その書法は漢字の音訓を以てし、その修辭は對句・疊句・冠辭・比喩法・擬人法等を多く用ひ、雄渾正大の氣に富みたり。參考書の重なるものは、賀茂眞淵「祝詞式解・祝詞考」
鈴木重胤「延喜式祝詞講義」
久保季茲「祝詞略解」
次田潤「祝詞新講」
御巫清勇「祝詞式新釋」
武田祐吉「神と神を祭る者との文學」
上田萬年「國語のために」

祈年祭 陰曆二月四日、風雨の災害なく年穀の豐熟せんことを神祇に祈る祭。

延喜式 五十卷。法令の施行細則を記せるもの。延長五（一五八七）年藤原忠平撰進す。

奉る朝貢の船や馬と解して、峽き國を廣くし、峻しき國を平けくするといふやうに取るのは、何の意義をも成さぬことである。かたゞ〳〵これはどうしても皇化宣傳使が仁義・平和の大道を高く揭げて、有形的には峽き國、險阻な國を平坦にし、精神的には惡政・惡俗に苦しむ國を化して道ある國とするといふ意味に取るべきであらうと思ふ。

かやうなことは、一見文法や古文辭に囚れた好事家の暇つぶしのやうにも見えるが、併し考へやうによつては、古文を正しく解釋するのは一種の大切な仕事で、殊に建國當初に國民の大理想の宣せられた偉大な文章の意味を、左と解くべきか右と解くべきか、消極的に解釋すべきか積極的に解釋すべきか、坐つて居て御土產を貰ふことと取るべきか、難路を切開いて尊い贈物を憐な人に與へることと取るべ

きかは、國文學に携る小さき學徒としてのみならず、日本國民としても輕視すべきことではあるまいと思ふ。

この文章に對して、かういふ解釋を與へた人が既にあるかどうか。私の知る限では、鈴木重胤が祝詞講義の中に、

さて船の滿て續くと云ふに、二義に亘りて聞ゆること有り。其の一は八百船千船の外國より參り湊ひて萬國の酋長等の貢賦を奉る義と、一は峽き國は廣く峻しき國は平けく爲りて、國土・人民の漸く大いに蕃息して、皇孫命の國を弘め給ふ義とを兼ねたり。

とあつて、多少似通つて居るやうにも見えるが、これはたゞ峽き國峻しき國といふに關聯させて見ただけで、我より往くといふ意味は現れて居ないやうに思はれる。

此の解釋を、或は神代の事實と思ひ比べて不妥當だと思

鈴木重胤　國學者。淡路の人。文久三(一八六三)年歿す。年五十二。

祝詞講義　正しくは延喜式祝詞講義といふ。二十六卷。嘉永元年十一月二十四日に稿を起し同四年七月晦日完成。註釋詳細、卷首に隨神の道を說けり。

ふ人があるかも知れぬ。それは私も認める所である。けれども此の點に關しては、朝貢說の方も同じことである。要するに、これは原始時代に於ける吾等の祖先の頭に描かれた理想の現れと見るべきで、針小棒大に寫し出された誇張ではあるが、同時にうぶな心に實現を豫期された主觀的事實と見るべきであらう。そして此の見方を以てすれば、遠くは伊邪那岐命が天照大御神に、「高天原を知らせ。」と言ひ、月讀命に、「夜の食國を知らせ。」と言ひ、須佐之男命に、「海原を知らせ。」と言はれたのも、宇受賣命が海中の魚族に對して、降臨された皇孫に從ふか否かと問うたのも、大國主命や日本武命が山河を跋渉しての功業も、四道將軍の派遣も、皆一種の皇化宣傳と見るべきであらう。これが公文書的の傍證としては、崇神天皇の十年、四道將軍を派遣する時に下された詔勅に

伊邪那岐命云々　古事記に「此の時伊邪那岐命いたく歡喜ばして詔り給はく、「吾は子生み生みて、生みの終に三柱の貴の子得たり」とのり給ひて、卽ち其の御頸珠の玉の緒母由良邇取り由良迦志て、天照大御神に賜ひて詔り給はく、「汝が命は高天原を知らせ」と事依さし給ひき。故其の御頸珠の名を御倉板擧之神と謂す。次に月讀命に詔り給はく、「汝が命は夜之食國を知らせ」と事依さし給ひき。次に建速須佐之男命に詔り給はく、「汝が命は海原を知らせ」と事依さし給ひき」　四一頁參照。

大國主命云々　「日本武尊」參照。

日本武命云々　崇神天皇十年、四道將軍を派遣し、大彥命を北陸に、武淳川別を東海に、吉備津彥を西海に、丹波道主を丹波に遣してその地を治めしむ。

古事記　四八頁參照。

民を導く本は教へ化くるにあり。今既に神祇を禮ひて災害皆耗きぬ。然れども遠荒の人ども、なほ正朔を受けず。これ未だ王化に習はざればか。それ群卿たちを選びて、四方に遣して朕が憲を知らしめよ。

とあるのが、此の祝詞に現れた積極的風化主義・仁義的帝國主義の史的實在を裏書するものであらうと思ふ。

祝詞については、文法的・修辭的・心理的に見て、精細に其の意義を調べ直すべき點が可なり多いと私は思つて居る。祝詞は傳說を大體そのまゝに書いた古事記などとは違つて、上代人が神々を慰める爲に美辭麗句の綴り合せに、小さい頭を惱ました結果の作であつて、單文を書くに適した文章上の原始人が複文を書いた爲に、かやうに後の研究者に疑惑の種を遺し、同時に努力の種を遺したのであらう。

（五十嵐力―「國語の愛護」による）

祈年祭の一節

辭別きて伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく、皇神の見霽るかします四方の國は、天の壁立つ極み、國の退立つ限り、青雲の靄く極み、白雲の墜坐向伏す限り、青海原は棹柁干さず、舟の艫の至り留る極み、大海原に舟滿て續けて、陸より往く道は、荷の緒縛堅めて、磐根木根履みさくみて、馬の爪の至り留る限り、長道間なく立て續けて、狹き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打掛けて引寄することの如く、皇大御神の寄さしまつらば、荷前は皇大御神の大前に、横山の如く打積み置きて、殘をば平けく聞召さむ。また皇御孫命の御世を、手長の御世と堅磐に常磐に齋ひまつり、茂し御世に幸へまつるが故に、皇吾が睦神漏伎神漏彌命と、鵜じもの頸根衝拔きて、皇御孫命の珍の幣帛を、稱辭竟へまつらくと宣る。（「延喜式」による）

五十嵐力　國文學者。文學博士。明治七年米澤市に生まる。東京專門學校文學科出身。早稲田大學文學部長。

皇神の見霽るかし云々　天照大神は日の神にまします故に、高天原より遠く國土を見渡し給ふなり。

荷前　貢物の初もの。

手長の御世と云々　「た」は接頭語。堅磐は堅き岩、常磐は長へに變らぬ岩。

皇吾が睦云々　天皇の親しき皇祖神と稱へ奉りて、鵜の如く頸を前につき出し垂れて神を敬ふなり。

珍の幣帛を云々　珍の幣帛を奉り置きて、善言美辭を盡くして神德を稱讃し奉れと、中臣氏がそこに集れる神主・祝部等にこの祝詞を宣り聞かするなり。

四　牧歌的精神

我が上代人の想像力は、全體として纏められた個々の說話に引きづられて、その全體の統括が危くされることに氣づかない程の狀態にあつた。その中に矛盾した想像力の活動をも許してゐる。複雜な事件、或は長年月に亘る事件に於ては、屢、この現象が認められる。例へば古事記の天地交涉の段の如きは、地上の事件が興味深く物語られる爲に、高天原の會議は常に同じ所に停止してゐる樣な感じを與へる。かういふ傾向は古事記全體の構圖の上にも現れて居る。出雲の國讓りの物語が熱心に物語られた後に、天孫が九州に降り、既に讓られた筈の統治權を確立する爲に、再び神武天皇の東征が物語られるが如き、その最も著しい例である。

［參考資料］
本居宣長「古事記傳」

古事記　四八頁參。

出雲の國讓り　四一頁參照。

統治權　主權の作用をいふ。

かくの如き傾向があるに關らず、古事記の物語全體には一つの明かな統一が認められる。想像力は如何に部分的說話に引きづられて行つても、この全體の統一を破る程ではなかつたのである。あらゆる說話は如何に不釣合に結合せられてゐても、どこにかく同じ方向に結合せられてゐて、その方向は過去の說明といふ一點に歸着してゐるのである。

古事記の個々の說話の纏め方を見ると、或事件の結果として生じた地名・人名・儀式、或は自然的な現象が物語られる時には、それが既に結末であるに關らず、實は物語の動機となつてゐるのである。例へば、「こゝを以て一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人なも生まるゝ。」といふ現象は、伊弉諾尊が黃泉に御下りになつた結果として物語られてゐるが、實はこの物語を生み出した驚嘆の感情から出發して、想像

力が活動して居るのである。古事記中の地名・傳說はすべてこの種のものである。更に著しいのは歌謠を中心とする物語である。歌謠は自然に流露する詠嘆であつて、物語に關係なく生まれるものであるのに、それを歌ひつぎ言ひついだ後代人は、その歌の背景として何等かの事件を想像せずにはおかない。かくして纏められた說話は、それが想像によつて物語られるとしても、なほ素朴な統一を失はない。この種の說話の多くが一つの系列に並べられる場合にも、常に核心となるべき題目があつて、それに對する驚嘆の感情がある。その題目となつたものは、皇室に神聖な權威があり、諸民族がそれによつて調和的に組織せられてゐるといふ眼前の狀態である。これらの狀態は、古事記に物語る如き事情によつて生じたのではなく、寧ろ古事記全體の構圖がこれら

歌謠　曲節に從ひて謠ひ又は語るもの。奈良朝以前のものにて現存せるものは古事記・日本書紀に收められたるもの二百餘篇、風土記その他に散見せるもの若干あるのみ。

の狀態から生じたと見るべきである。あの多數な物語が比較的に混雜なくして並べられてゐるのは、この種の歷史を要求する心から出た想像力が、材料を歷史的に排列するといふ所にその主要な力を振つたからであらう。

こゝに於て我が上代人の想像力は論理的法則や美的法則には導かれてゐないことが知られる。卽ちその描く所には統一が缺けてゐる。しかしそこには素朴な驚嘆の感情が援助をなしてゐて、この驚嘆の感情が一種縹渺たる氣分の統一を造り出してゐる。それは素朴な原始藝術に見る美しさである。

かくの如き美しさはイリアスなどと比べらるべきものではない。イリアスには完全に發達した論理的法則と美的法則とが根柢となつてゐて、神の描寫に當つてはこれを必

イリアス　ギリシャ最古の大詩人ホーマーの二大敍事詩の一。トロヤの皇子パリスが、スパルタ王の妃ヘレンを竊めるにより、スパルタ・ギリシャ

ず人間と區別する注意深い用意を缺いてはゐない。神祕の世界は常に神祕の世界であり、人間の世界は常に人間の世界である。さうしてその各〻の世界がそれ〴〵に自らの立場に於て合理的であるのみならず、その合理的な世界を描くに當つて、完全な藝術的表現の力を見せて、時・處・心理的推移などに於ける嚴密な統一、事件全體を總括する構圖の力强い確かさ、急處のみを擇ぶ巧妙な材料の取捨、描寫の誇張なき素直さ、言葉の簡素、すべてこれらの精練せられた技巧は我々の眼に驚嘆に値するものである。併しながら、その藝術品としての偉大さ、美しさは原始的からは遙かに距つてゐるのである。これに反して我が古事記に見る美しさは、なほ原始的な素朴な所に存するのである。

古事記の描寫は豐富な直觀を貧弱な思惟によつて纏め

の聯合軍が前後十六年に亘りてトロヤと戰ひし物語なり。

直觀　外界の事物を五官の働によつて直下に覺得すること。

たこいふ印象を與へる。その描寫は確に優れたものではないが、その直觀的な描き方に於て實に捨て難い美しさがある。例へば、

國わかく浮脂(うきあぶら)の如くして、くらげなす漂へる時に、葦芽(あしかび)の

ごと萌えあがるものによりて、成りませる神の名……

といふ描寫には、水よりも遙かに實質がありさうであるのに、固りもしない浮脂のごろ〳〵した感觸や、形あつてなきが如き柔かい水母の水に浮いた感じや、また沼澤地の泥の間から勢よく萌出てくる葦の芽の不思議な生の感じを、これほど感覺的に鮮かに描いた例はない。「大地は形なく空虛であつた。その深みの面には闇があつた。さうして神の靈が水の面に動いてゐた。」とは創世紀の卷頭の描寫であるが、これは大地から形と物と光とを捨象した消極的な描寫であ

國わかく云々　古事記に、國稚如浮脂而、久羅下那洲多陀用幣琉之時、（魚字以上十字以音）如葦牙因萌騰之物而、成神名。

創世紀　舊約聖書中モーゼ五經として傳へられたるものの一なり。天地の創造より人類の開闢に至り、人種の分別より民族の成立に及ぶ。以てイスラエル國民の祖先史となせり。

つて、積極的に渾沌とした世界を描いたものではない。希臘人はそれよりは一段と具體的であつた。彼等は地と海と空とを渾融した固形でもなく、流動體でもなく、透明でもない、渾然たる狀態を想像したのである。併しそれは思想的存在である點に於て創世紀と變らない。支那人に至つては、日本書紀がその卷頭に引用した「渾沌(トシテ)如鷄子(ノ)」といふ表はし方で、全然思想的な比喩を以て語つてゐる。これらに比して我が古事記の描寫は、最も具象的な、最も鮮かなものである。

この他に、なほ古事記には見のがしてならないものがある。お伽噺的な無邪氣な愛らしさが存することである。それは如何にも透明で、朗かで、子供のやうに罪がない。もとより古事記にも前後に調子の相違はあるが、神話的分子の勝つた部分では、兎や鼠や魚や鳥などが人間に交つて、色々の役

日本書紀　七九頁參照。

渾沌如鷄子　六頁挿圖參照。

目を務め、また玉が女と化し、女が蛇に姿を變へても、それが不自然であるといふ感じを與へないほどに、その物語全體がお伽噺的である。しかしこの調子は漸次に弱まつて來て、後半を支配してゐるものは自然人らしい怒や、憎しみ、或は牧歌的な愛情の歡びや、悲みである。この調子の變化は、全體の構圖が歴史的排列に基づいてゐる點から考へても、極めて自然の推移であるといはねばならぬ。然るに、かくの如き變化を有するに拘らず、その天眞から出た氣品に至つては依然として變りがない。あらゆる爭鬪や弑虐の描寫も、常に子供の心のやうに透明にして朗かに浮かび出てゐるのである。

牧歌　牧牛者の歌。

その子供らしい美しさは、必然の結果として內容の深刻さを缺く。この原因はまた牧歌的な我が上代人の性情に基

づくものであつて、必ずしも意識の開展の幼稚にのみ依るものではない。こゝに於て、その深さの缺乏といふ弱點は、その半面に愛らしい牧歌的精神を伴なふことによつて償はれて餘りあるのである。

古事記に於ける深さの缺乏は、その中に含まれる人道的な人生の見方によつて補はれねばならぬ。古事記全體に漂うてゐる牧歌的な美しさは、この濕へる心情の流露である。深さを缺くことが大きい弱點であるとしても、この濕へる心情を缺くほどに甚しくはない。支那の古い神話傳說を錄した史書は、その大きさと深さとに於て古事記に優つてゐるかも知れないが、藝術としては到底その右に出づることは出來ないであらう。そこには感情が少く、濕へる心情が著しく足りない。古事記は子供の書であるとしても、その美し

支那の云々　司馬遷の著なる史記百三十卷の類を指す。

さに於ては、必ずしも大人の書に劣るものではないのである。（和辻哲郎―「日本古代文化」による）

おほかた古を考ふること、更に一人二人の力もて悉くあきらめ盡くすべくもあらず。又よき人の說ならんからに、多くの中には誤もなどかなからむ。必ずわろきことも雜らではえあらず。そのおのが心には、今は古の心悉く明かなり、これを置きてはあるべくもあらずと思ひ定めたることも、思ひのほかに又人の異なるよき考も出で來るわざなり。數多の手を經るまに〳〵、さき〴〵の考の上をなほよく考へ極むるからに、次々に詳しくなりもて行くわざなれば、師の說なりとて必ずしも泥み守るべきにもあらず。よき惡しきをいはず、純ぶるに古きを守るは、學問の道にはいふかひなきわざなり。

（本居宣長―「玉かつま」）

和辻哲郎　哲學者。明治二十二年、兵庫縣に生まる。東京帝國大學哲學科出身。京都帝國大學助教授。

本居宣長　醫者・國學者。伊勢松坂の人。鈴の屋と號す。紀伊侯に仕ふ。享和元（二四六一）年歿す。年七十二。

五　雄大な氣魄

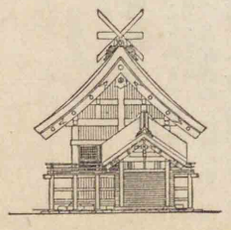
神代の昔、大國主命は出雲國に在つて日本の國土の一部を支配して居られたが、その領土を天孫瓊々杵尊に讓り渡されたので、天孫は命のために立派な宮殿を造營せられた。それが今の官幣大社出雲大社の神殿であつて、史上にいふ天日隅宮である。

この神殿は太古に於ける住宅の狀態を知るための好資料である。それは南面した眞四角なもので、四方各〻二間、中心に太い直徑三尺六寸の眞柱があり、その右に間仕切がある。神座はその間仕切の後にある。四方は廻緣で、緣の幅は前面のみ特に廣くて、長く挺出した屋根を以て蔽はれて居る。出入口は前面右側の間で、階がその前にある。照明設備の貧弱

大國主命云々　古事記に、「こゝをもて建御雷神・天鳥船神の二柱の神、出雲國の伊那佐の小濱に降りつきて、十掬劍を拔きて浪の穗に逆さまに刺立てて、その劍の前にあぐみゐて、その大國主神に問ひ給はく、「天照大御神・高木神の命もちて問ひに遣せり。汝がうしはける葦原の中つ國は我が御子の知らさむ國とことよさし給へり。故、汝が心奈何にぞ。」と問ひ給ふ。（中略）爾に答へまつらく、「僕が子等二神の白せるまに〳〵僕も違はじ。この葦原の中つ國は命のまに〳〵既に獻らむ。唯僕が住所をば、天つ神の御子の天津日繼し

な太古にあつては、晝間は戸外で働き、夜は寢るばかりで、家はたゞ寢るためと物を藏するためとのものであつた。そしてその前面の廣い緣と、その下の屋根を以て蔽はれた地面とは、晝間の仕事に便したものである。面白いことには、この間取が今日でも一般の日本民家の間取の元になつて居り、更にそれが朝鮮の咸鏡南道・江原道・平安北道の住宅、支那雲南の農家等と同一系統であることである。この田字形の間取が、後世に至つて生活の必要に應じてさまゞに變化したのである。

この出雲大社の神殿は南面して居るのに、神座は西に向いて居る。公衆が北に向いて參拜するのに、神座が西に向いてゐては、神社の建築としては全くその體裁が備はつて居らぬことになるが、これは、太古にあつては社殿と宮殿との

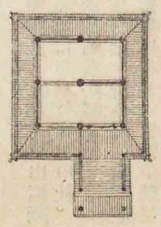


ろしめさむ登陀流天の御巢なして、底津石根に宮柱ふとしり、高天原に氷木高しりて治め給はば、僕は百足らず八十垣手に隱りて侍ひなむ。また僕が子等百八十神は、八重事代主神、神のみをさきと爲りて仕へ奉らば、違ふ神はあらじ。」かく白して乃ち隱りましき。故、白し給ひしまに〳〵、出雲國の多藝志の小濱に天の御舍を造りて云々。」

天日隅宮　この名は日本書紀・出雲風土記などに見ゆ。

別はなかつたからで、この神殿ももとは住宅であつたことを證するのである。そも〳〵大社町の地勢は、北に山を負ひ、東南は平野であつて、西は風景絶佳の伊奈佐濱である。大國主命は坐ながらにして海を眺め、遠く朝鮮の方を望んで居られたのであらう。

太古は建築材料に加工することはなかつた。天然の木を地中に埋立てて柱とし、桁を横たへ、梁を架け、それらの材料を藤葛の類で縛つて、段々に築き上げて屋根を作つたものである。屋根は萱又は藁で葺き、その上に千木・勝男木を聳えさせたもので、その恰好は先づ今日の出雲大社の神殿のやうなものであつたらう。諸册二尊が造り給うたといふ八尋殿も亦これに類似のものであつたらうと想像される。文獻によると、天日隅宮を造る條に、「千尋の栲縄を以て結びて百



八尋殿　古事記に、「その島に天降りまして天之御柱をみ立て八尋殿を見立て給ひき。」

千尋の栲縄云々　日本書紀に、「以千尋栲縄、結爲百八十紐。其造宮之制者、柱則高太、板則廣厚云々。」

八十の紐となす。柱は卽ち高く太く、板は卽ち廣く厚く。」とあり、その柱の立て方は、「底津石根に宮柱布斗しき立て、高天原に氷木多迦斯理て。」とある。この千木が後世變化して破風となつたのである。

所傳によれば、出雲大社は最初高さが三百二十尺、桁の長さが八十尺であつたが、その後、高さが百六十尺に、桁の長さが四十尺になり、更に高さのみがその半分になり、大いさは依然として四丈四方であつたといふことである。そして現今のものは高さ約八十尺、大いさ約四十尺四方で、神社の本殿としては實に偉大なものである。尤も面積の上からいへば、まだ〳〵大きいものが後世には出來てゐる。現今に於て、一番大きな神殿は京都の八坂神社の本殿であつて、百五坪あり、次は宮島の嚴島神社の本殿で、八十坪餘ある。然るに出

破風　屋根の切妻の合掌形の板。

八坂神社　京都市東山區祇園町にあり。官幣中社。素盞嗚尊を祭る。

嚴島神社　廣島縣佐伯郡嚴島町に在り。官幣中社。宗像の三女神を祭る。

雲大社のは四十四坪餘に過ぎないのである。併しながら建物の偉大さは必ずしも建坪にのみはよらない。柱を始め諸材料が太く、屋根が高く聳えてゐて、雄壯な氣魄を現すものが卽ち偉大な建築といふべきである。この意味に於て出雲大社は矢張り日本第一の大社殿である。かくの如き大建築がすでに神代に於て造られてゐたことを見ると、我々の祖先が如何に雄大な氣魄を有つて居たかが窺はれる。所が現今の出雲大社の建物でさへ驚くべき大建築であるのに、その初は三百二十尺の高大なものであつたといふことは、建築學上から考へて見ても、首肯の出來ないことである。神代の昔に於て、繩絡げの構造を以て三百二十尺の高さのものを造り上げるといふことは、到底不可能のことであつたらう。私は建築家の立場から考へて、出雲大社は太古から依然

として八十尺の高さであつたらうと思ふ。既往に於ては、その高さが百六十尺であり、その以前には三百二十尺であつたといふ所傳は、たゞ社殿の尊嚴を增すために他ならなかつたのであらう。文獻と實際とを突合はせて見ると、旨く符合しない例は澤山あるもので、出雲大社もその一例であらうと思ふ。

この出雲大社と同型の神殿を有するものは山陰地方に甚だ多い。更にその形式の變化した、所謂大鳥造と命名してゐるものが北陸道にも散在して居る。恐らくは出雲系統の民族が山陰道を根據として、日本海沿岸に發展してゐたことを證するものであらう。

底津石根に宮柱ふとしり立て、高天原に千木高しりて、皇御孫命の御國を永へに守護します出雲大社の神殿は、我が

大鳥造　官幣大社大鳥神社の本殿の造り方にて、大社造の一歩進化したるものなり。前面中央に入口を設け、內部の心柱を撤去し、横に床を劃して內外兩陣を區分せるほかは、殆ど大社造に異ならず。

日本に於ける社殿の根源であり、住宅の根源であると共に、太古に於ける最大の木造建築であつて、我等の祖先の氣魄が如何に雄大であつたかを物語るものである。

（伊東忠太の文による）

蓋し聞く、上古の世未だ文字あらず。貴賤と老少と口々に相傳へ、前言と往行と存して忘れざりき。書契ありしより以來、古を談ることを好まず、浮華競ひ興り、還りて舊老を嗤り、遂に人をして世を歷て彌ゝ新に、事をして世を逐ひて變改せしむ。顧みて故實を問ふに根源を識ることを靡し。國史と家牒とその由を載すといへども、つまびらかなること少く、猶遺るところ有り。愚臣言はずば、恐らくは絶えて傳ふることなけむ。幸に召問を蒙りて蓄憤を攄べむとおもふ。故、舊說をしるし、敢へて上聞す といふ。（齋部廣成―「古語拾遺」による）

伊東忠太　工學博士。古代建築に精し。東京帝國大學名譽教授。

參考資料

古語拾遺　一卷。大同二（一四六七）年、齋部廣成の撰。大古に於て太玉命と天兒屋根命とは相並びて祭祀に與りしに、後に天兒屋根命の後胤なる中臣氏のみ代々盛んにして、太玉命の後胤なる齋部氏は振はざるを憤りて、その事を漢文にて認めて獻言せるものなり。參考書には、

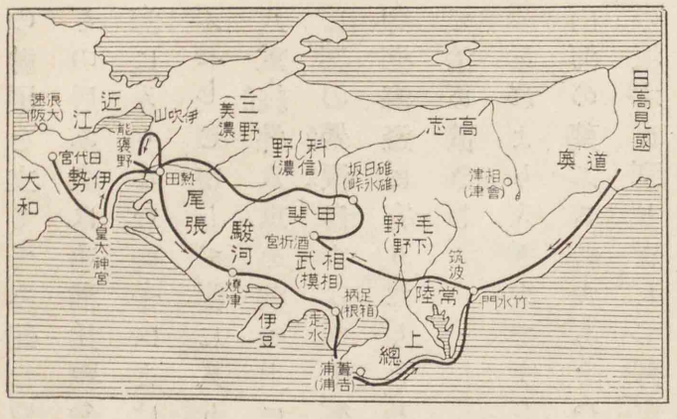
龍野熙近「古語拾遺言餘抄」
久保季茲「古語拾遺講義」
池田眞榛「古語拾遺新註」

齋部廣成　神官。從五位に叙せらる。

六　日本武尊

こゝに天皇また倭建命に、「東の方十二道の荒ぶる神又まつろはぬ人どもを平けやはせ。」と詔り給ひて、吉備臣等が祖、名は御鉏友耳建日子を副へて遣す時に、柊の八尋矛を賜ひき。乃ち命を受けたまはりて、罷りいでます時に、伊勢大御神の宮に參りまして、神の御廷を拜み給ひて、そのみ姨倭比賣命を訪ひ給ひき。倭比賣命草薙劍を授け賜ひ、又御囊を賜ひて、「若し急のことあらば、この囊の口を解き給へ。」となむ詔り給ひける。

東の國にいでまして、山河の荒ぶる神又まつろはぬ人どもを悉く平けやはし給ひ、相模國に到りませる時に、その國造詐りて白さく、「此の野の中に大沼あり。この沼の中に住める神いたく千早振る神なり。」と申す。こゝにその神をみそなはしにその野に入りましつれば、その國造その野に火をなむつけたりける。乃ち欺かれぬとしろしめして、かのみ姨倭比賣命の賜へる囊の口を解きあけて見給ふに、その裏に火打ぞありければ、先づ御刀もて草を苅りはらひ、その火打をもちて火を打ちいで、向火をつけて、燒き退けて還り出でまして、その國造等を皆切り滅し、卽ち火をつけて燒き給ひき。其地をば今に燒遣とぞ謂ふ。



參考資料

古事記　三卷。元明天皇和銅四年九月十八日、太安麿勅を奉じて、語部の稗田阿禮の暗誦せる神代より推古天皇の朝までの傳說・歷史を記錄したるものにて、翌年正月二十八日に成れり。漢字の音訓を以て國語を記し、よく上代の面目を傳へたり。參考書には、本居宣長「古事記傳」富士谷御杖「古事記燈」次田潤「古事記新講」

燒遣　靜岡縣志太郡燒津町に燒津神社ありて日本武尊を祀る。前に相模國とあるは誤か。

それより入り幸でまして走水海を渡ります時に、その渡の神浪を立てて、み船たゆたひてえ進み渡りまさず。こゝにその后、み名は弟橘比賣命白し給はく、「われ御子にかはりて海に入りなむ。御子はまけの政とげて、かへりごとまをし給ふべし。」と申して、海に入りまさむとする時に、菅畳八重・皮畳八重・絁畳八重を波の上に敷きて、その上に下りましき。こゝに其の暴浪自らなぎて、御船進みき。後七日ありてその后の御櫛海邊に寄りたりき。乃ちそのみ櫛を取りて、御陵を作りて治め置きき。

それより入り幸でまして、悉く荒ぶる蝦夷どもを平け、又山河の荒ぶる神たちをやはして還りのぼります時に、足柄の坂本に到りまして御粮きこしめす處に、その坂の神白き鹿になりて來立ちき。乃ちその咋遺りの蒜の片端もて待ち

走水海　浦賀海峽。

御陵　神奈川縣中郡山西村に吾妻神社あり。

足柄の坂本　今の足柄峠。

打ち給ひしかば、その目に中りて打ち殺されたりき。その坂に登り立ちてねもごろに歎き給ひて、「阿豆麻波夜」と詔り給ひき。それよりその國を阿豆麻と謂ふなり。

その國より越えて甲斐に出でて、酒折宮にまし〳〵ける時に歌ひ給はく、

にひばり　筑波を過ぎて　幾夜か寢つる

こゝにその御火燒の老人、御歌を續ぎて歌ひけらく、

かゞなべて　夜には九夜　日には十日を

こゝを以てその老人を譽めて、あづまの國造にぞなし給ひける。

その國より科野國に越えまして、科野の坂の神を平けて、尾張國に還り來ましき。こゝに、その御刀の草薙劍を、尾張國造の祖、美夜受比賣の許に置きて、伊服岐能山の神を取りに

酒折宮　今の甲府市の東方なる西山梨郡里垣村の酒折八幡宮がその遺蹟なりといふ。

かゞなべて　日々並べての意。

科野の坂　長野縣伊那郡より岐阜縣へ越ゆる險道。

美夜受比賣　熱田大神緣起に、尾張氏の健稻種公の妹宮酢媛とあり。

伊服岐能山　滋賀縣と岐阜縣との堺なる伊吹山。

幸でましき。乃ち「この山の神は徒手にてたゞに取りてむ。」と詔り給ひて、その山に登ります時に、山邊にて白き猪に逢へり。その大いさ牛の如くなりき。命、言擧げして詔り給はく、「この白き猪になれる者は、その神の使者にこそあらめ。今殺らずとも、還らむ時に殺りてむ。」と詔り給ひて登りましき。こゝにその山の神、大氷雨を零らして、倭建命をうち惑はし奉りき。乃ち、還り下りまして、玉倉部の清泉に到りて、息ひませる時に、御心やゝ寤めましき。よりてその清泉を居寤清水とぞ謂ふ。

其處より發たして、當藝野の上に到りましし時に詔り給はく、「吾が心恒は虛をも翔り行かむと念ひつるを、今吾が足え歩まず、當藝斯の形に成れり。」とぞ詔り給ひける。そこを當藝と謂ふ。そこよりやゝ少し幸でますに、いたく疲れませる

玉倉部　滋賀縣坂田郡横川と岐阜縣不破郡今須の間にある長競の地とも、坂田郡醒ケ井ともいふ。

當藝野　岐阜縣多藝郡。

當藝斯　船尾の舵。

に因りて、御杖を衝きてやゝ〳〵に歩みましき。そこを杖衝坂と謂ふ。尾津の前の一つ松の許に到りませるに、先に御食せし時、そこに忘られたりし御刀、失せずして猶ありき。乃ち御歌よみし給はく、

尾張に　たゞに向かへる　尾津の前なる　一つ松
吾兄を　ひとつ松　人にありせば　太刀佩けまし
を　衣著せましを　一つ松　吾兄を

そこより幸でまして三重村に到りませる時に、又「吾が足三重にかゞまりて、いたく疲れたり。」と詔り給ひき。よりてそこを三重と謂ふ。

そこより幸でまして能煩野に到りませる時に、國思びて歌ひ給はく、

大和は　國のまほろば　たゝなづく　青垣山こも

杖衝坂　三重縣三重郡。尾津の前　三重縣桑名郡多度村・古濱村の地。

三重村　三重縣三重郡内部村采女。

能煩野　三重縣鈴鹿郡の平野。

國のまほろば云々　大和は周圍が山で圍まれたるよき國の意。

れる　大和しうるはし

また、

命の　またけむ人は　たゝみごも　平群の山の熊

白樫が葉を　髻華に挿せその子

又歌ひ給はく、

はしけやし　吾家の方よ　雲居たち來も

この時御病甚急になりまして、かむあがりましぬ。乃ち、驛使を立てまつりき。

こゝに大和にます后また御子たち、もろ〳〵下り來まして御陵を作りて、そこの那豆岐田に匍匐ひ廻りて、泣き悲しみ給ひき。

こゝに八尋白智鳥に化りて、天に翔りて濱に向きて飛びゆきぬ。乃ちその后また御子たち小竹の苅杙にみ足跣り破

たゝみごも　平群の枕詞。平群の山　奈良縣生駒郡生駒村の山地。熊白樫

髻華　挿頭。はしけやし　愛すべき。那豆岐田　廡附田の義にて、御陵の周圍の田をいふ。

れども、その痛きをも忘れて、哭く〳〵追ひいでましき。

その國より飛びかけり行きまして、河内國の志幾に留りましき。よりてそこにも御陵を作りて鎭りまさしめき。その御陵を白鳥御陵とぞ謂ふ。然れども亦そこより更に天翔りて飛びゆきぬ。（「古事記」による）

弘文天皇御製

侍宴。

皇明光日月、　帝德載天地。

萬國表臣義。　三才並泰昌。

述懷。

道德承天訓、　鹽梅寄眞宰。

安能臨四海。　羞無鹽撫術。

（「懷風藻」）

志幾　大阪府志紀郡長吉村・三木本村。

白鳥御陵　大阪府南河内郡古市村大字輕墓。

參考資料

懷風藻　一卷。天平勝寶三年、（一四一一）淡海三船編す。天智天皇より淳仁天皇に至る間の漢詩百二十篇を收む。參考書には、

釋清潭「懷風藻新釋」

弘文天皇　諱は大友。天智天皇の長子。博學多通にして詩文をよくし給ふ。御在位僅に八ケ月にて崩ず（一三三二）。御年二十五。

七　入鹿の父

時は紀元千三百五年、皇極天皇の御代の四年六月の或日の晝。大和國甘樫の岡、蘇我蝦夷の邸。家の建築は凡て唐風を摸したるものと知るべく、正面の一段高き處に石疊を敷き、四方に石の柱を立て、錦の帳を卷上ぐ。正面と左右に石の階段あり。平舞臺にも一面に石疊を敷詰め、上の方にも下の方の出入口にも同じく錦の帳を垂れたり。後は野を越え森を隔てて三笠山など遠く見ゆ。一段高き處の下の方に机をひかへ、史の慧尺、二十七八歳、榻に凭りて古き書を讀むやがて下の方にて、「鎮まれ。鎮まれ。」といふ聲して、葛城赤猪は矛を持ち、巫女七人を支へながら出づ。巫女いづれも手に木綿幣かけたる榊を持つ。

赤猪「退れ、退れ。おのれら漫りに此處へ踏込んだら、怖ろしい目に逢はうぞ。」

參考資料
岡本綺堂「綺堂戲曲集」
皇極天皇　舒明天皇の皇后。天皇の崩後、即位して飛鳥淨見原宮におはす。在位三年。
甘樫の岡　高市郡飛鳥村豐浦に在る岡。俗に向山といふ。
蘇我蝦夷　馬子の子。推古・舒明の兩朝に大臣たり。その子入鹿と共に僭逆甚しく、遂に誅せらる。

巫女（口々に叫ぶ）「退りませぬ。退りませぬ。」

赤猪「えゝ、さうぐ〳〵しい奴。耳ががん〳〵するわ。これ、よく聞け。場處もあらうに、蘇我の大臣のお邸へ、おのれら巫女の分際で押して通つたら命がないと思へ。」

巫女一「わたしどもは神樣に仕へる者でござります。」

巫女二「いかに大臣の御威勢でも、めつたに命は取られますまい。」

赤猪「いや、御主君はその神樣が大の嫌ひで、佛でなければ夜も日もあけぬお人ぢや。さあ、歸れ、歸れ。」

巫女「いや、歸りませぬ、歸りませぬ。」

（巫女等は上の方へ押して行かんとするを、赤猪は遮る。奥の方より蘇我蝦夷、六十餘歳、出で來りて巫女等を睨む）

蝦夷「えゝ、さうぐ〳〵しい奴等ぢや。（一同は跪く）この蝦夷に逢

つて何を訴へようといふのぢや。仔細をいへ。」

巫女二「そのお願は他でもござりませぬ。この春の末から……。」

蝦夷「むゝ、春三月から照りつゞいて、この六月に至るまで雨といふものは一滴も降らぬ。ついては大和一國の名僧知識を集め、雨乞の祈をさゝげて居るのぢや。やがてその奇特も見ゆるであらう。待つてをれ。」

赤猪「それは唯今も申し聞かせましたが、この女子どもの申しまするには、我が日の本は神國なれば、佛に祈つたとて効はあるまい。代つて我々に雨を祈らせよと、かやうに申し張るのでござりまする。」

(雷遠く鳴る。蝦夷は後を見る)

蝦夷「あれ、聞け。雷が鳴るわ。」

(人々も空を仰ぐ。雷鳴つゞいて聞ゆ)

赤猪「やい、おのれ等、佛の奇特は目のあたりぢやぞ。雷が鳴ればやがて雨も降らうわ。これでもおのれ等は佛を疑ふか。たはけ者め。起て、起て。」(巫女等は顔を見合はせる)

赤猪「さあ、起て、起て。」

蝦夷「起たぬと一々に細首をねぢ切つて門前に梟すぞ。あれ、あれ、雷の音が次第に近づいてくるわ。」

(雷の音俄に凄じく聞ゆ。巫女等は耳をおほひて床に伏す。下の方の帳をかゝげて佐伯金丸劍を帶びて出づ)

蝦夷「佐伯金丸、案内も乞はずに何しにまゐつた。」

金丸「今日は三韓の使節に拜謁仰せつけらるべき當日。文武百官すでに參列致せしに、入鹿の大臣たゞ一人、未だ參内なきは如何。それがしお迎にまかり越した。」

蝦夷「入鹿は病氣ぢや。」

入鹿　蝦夷の子。この頃國政を專にし、暴戾を極む。

金丸「え。（考へる）俄に病氣とは……。」

蝦夷「我々親子に二心を懷くものあつて、密に出入りを窺ふといふ噂もある。かたゞ〳〵以て今日の參内は遠慮する筈ぢや。」

金丸「一國の大臣ともあるべきものが、目にも見えぬ敵を恐れて、今日の參内を止むるなどことは、日頃にも似合はぬ御卑怯なことぢや。異國の使にも笑はれませうが……。」

蝦夷「なに、卑怯ぢやと……。よい、よい。然らば入鹿に參内させて蘇我の一家の威勢を見せ、二心を懷く奴原を睨み伏せてくるゝわ。」

赤猪「では、その趣を入鹿の大臣へ……。」

蝦夷「入鹿にはおれが直々にいひ聞かせる。（行きかけて赤猪を見かへる）その巫女どもを早く追拂へ。」

（蝦夷は奥に入る。雷の音遠く聞ゆ）

赤猪「さあ、お咎を受けぬ中に、行け〳〵。」

（赤猪は巫女を追立てて下の方に去る。雷の音止む）

金丸「慧尺殿、慧尺殿。」

慧尺（始めて顔をあげる）「おゝ、金丸殿か。」（書を手にして階段を降りる）

金丸（進み寄る）「友達の好みに教へたいことがある。かねゞいふ通り、この邸へ毎日出入りするのは、お身の爲に悪しからうぞ。（いひかけて奥を窺ふ）心急げば、くどうはいふまい。蘇我の一家の悪逆次第に增長して、父の蝦夷、悴の入鹿、上を輕んじ下を虐げ、やがては日本を覆さうも知れぬ謀叛人と、世間のあらゆる憎悪、あらゆる憤怒、あらゆる呪詛は皆この一家の上にかゝつてゐる。それを知りつゝ彼等

と親しくして、まさかの時にまきぞへの禍を受けたら何とする。」

慧尺（笑ふ）「それで私に出入りをするなといふのか。その親切は忝いが、わしには又わしの務がある。」

金丸「むゝ、さてはお身も權勢に阿つて、入鹿親子の徒黨となつたか。」（つめ寄る）

慧尺「慧尺が家の職分は史ぢや。日本國の歷史を書くべき大事の役目ぢや。史の家に生まれたものは古い記錄を讀まねばならぬ。異國の書物も學ばねばならぬ。わしがこの邸へ近しく出入りするのは、こゝの庫に山のやうに積んである和漢古今の書物を讀みつくさうが爲ぢや。蝦夷・入鹿の親と子が惡人であれ、謀叛人であれ、それとこれとは別のことぢや。」

金丸（あざ笑ふ）「なる程、お身は學問の人だけあつて、變つた理窟を捏ねるものぢや。たとひ惡人の友となつても、好きな書物が讀みたいか。」

慧尺「その持主が惡人でも善人でも、書物の値に變りがあらうか。」（顏をそむけて書を讀む）

金丸「よい、よい。もう此の上は何もいふまい。何時いかなる大事が出來して、禍その身に及ぶとも、必ず騷ぐな、驚くな。晴れたる日にも霹靂が落つるぞよ。」

（金丸は足早に下の方へ去る。蝦夷の嫁當麻娘子、十八九歳、上の方の帳を揭げて窺ひゐる。慧尺は書に讀耽りて、思はず階段に腰をおろす。奥より蝦夷出づ）

蝦夷「誰も居らぬか。おゝ、慧尺はそれに居たか。大分面白さうに讀耽つてゐるな。（立寄つてのぞく）何を見てゐる。」

慧尺（仰ぎ見る）「昨日から三國志を讀んで居ります。」

蝦夷「おゝ、三國志、……それはこの頃、唐船で始めて日本へ送つて來たものぢや。庫に積入れたまゝで、わしもまだ詳しく讀んで居らぬが、なんでも東漢の末から魏・蜀・吳三國の歷史を面白く書いたものぢやと聞いてゐる。わしも若い時から書物を讀むのが大好きで、我が國の古い記錄はいふに及ばず、天竺・唐土・三韓の書物まで、手の屆く限は寄せあつめて、五つの石庫に積重ねてある。およそ日本國中この蝦夷ほどに書物を蓄へてゐるものは二人とあるまい。（上の方を指さす）蝦夷が家の石庫は日本の知識の庫ぢや。あの庫の內には天文・地理・歷史・文學・宗教、その他諸の書物が何でも藏めてある。萬一水や火の禍で、あの書物を皆失つてしまつたら、日本は暗闇も同然ぢや。はゝゝゝゝ。」

三國志　六十五卷。晉の陳壽の撰。魏・吳・蜀の三國鼎立の事蹟を記せる歷史。

東漢の云々　東漢は後漢といふに同じ。支那漢の景帝六世の孫劉秀、洛陽に都し、光武皇帝と稱せしより獻帝に至るまで百九十六年間。その末に天下大いに亂れ、群雄互に攻伐せしが、曹操、獻帝を擁して北部を平げ、孫權南方を服し、劉備西部を從へ、遂に魏・吳・蜀の三國鼎立せり。

我が國の古い記錄　その中には天皇紀・國記などの重要なるものありしなり。

慧尺「いづこの家を見ましても、矛や楯を蓄へてゐるものは澤山ござるが、書物を蓄へてゐるものは滅多にござらぬ。御當家のお蔭を以て、我々も知識を廣めました。」

蝦夷「さういはるれば、わしも滿足ぢや。しかし、その三國志にはどんな事が書いてあるな。」

慧尺「今日は第七の卷を讀みました。漢の將軍董卓が宮中で殺さるゝ所を。」

蝦夷「その董卓といふ男は、どうして殺された。」

慧尺「威勢を恃んで上を凌ぎ、惡逆募りて內外の望を失ひ、遂に不意討にせられたのでござる。」

蝦夷「強い者は常に妬まるゝものぢや。しかして、その最期の有樣は……。」

（上の方の帳をかゝげて蝦夷の次男物部津輕、二十二三歲、その妻

董卓　支那後漢の權臣。隴西臨洮の人。功を以て累遷して河東の大守となり、破虜將軍に昇る。帝辨立つに及び、袁紹・何進と相謀つて宦者を誅さんとし、卓を招く。卓、兵を引いて京に上り、遂に何太后を弒し、帝辨を廢し、獻帝を擁立して頗る暴威を振ふ。紹等は卓を討たんとせしが、卓は長安に移り、帝を擁して凶暴をなし、自ら太師となり、車服を天子に擬す。已にして王允・呂布等の謀に陷つて遂に刺殺さる。

當麻娘子と共にひそかに出で來りて聽く）

慧尺「先づ、王允・黄琬・呂布などといふ人々が心を合はせ、宮中に數多の兵を伏せ置いて、董卓が參内するを待受けて居りました。」

蝦夷「むゝ。」（進み寄る）

慧尺「かくとも知らぬ董卓が、宮中なればとて油斷して、車より降りんとする所を、不意に矛を以て突落し、『逆臣董卓を誅戮す。』と呼ばはつて、難なくその首を打取りました。」

（津輕と當麻は顔を見合はせる）

蝦夷「卑怯な奴原ぢやのう。（罵る）董卓は果して逆臣であらうか。」

慧尺「上を凌ぐものは逆臣でござらう。この三國志にも正に逆臣と記してござる。」

（慧尺は書を差附けて見せる。蝦夷も覗いて見るやがて蝦夷はその書を奪ひ取りて床に打付ける）

蝦夷「このやうな書物は讀まぬが優しぢや。」

當麻「あれ大切の御本を……。」

蝦夷「おゝ、當麻、入鹿はもう參内したか。」

津輕「唯今參内いたされました。」

蝦夷「おゝ、さうであつたか。今日の參内はやめさせうと思つてゐたが、卑怯と言はるゝが忌々しさに、父がすゝめて出して遣つたが……。（少しく考へて不安らしく）して、今日の供には誰が參つた。」

當麻「葛城赤猪を始として、鎧うたるもの五十人を召連れました。」

蝦夷（神經やゝ昂ぶる）「何十人連れたとて、それは門前までの

警固ぢや。これ慧尺、董卓は宮門の内で殺されたのぢやな。

（獨言のやうに）入鹿とても殿上に昇れば身一つぢや。」

津輕・當麻「え。」

津輕「なぜ、そのやうな忌まはしいことを……。」

（雷鳴また烈しく聞ゆ。當麻驚く。慧尺は落ちたる書を靜かに拾ひ取り、塵を打拂ひて再び讀む。蝦夷はつと寄りて、その肩を掴む）

蝦夷（詞忙しく）「今日は何やらいら〳〵して心が落着かぬ。お身は史、歴史を書く職分の男ぢや。若しもお身がその三國志を書くとしたなら、やはり彼の董卓を逆臣と記すか。」

慧尺「勿論でござる。」

蝦夷「たとひ日頃から董卓の恩を受けてゐても……。」

慧尺「恩や義理は私事。善は善、惡は惡と、ちつとも飾らず詐らず、末世末代に書傳ふるが史の務ではござらぬか。」

蝦夷「小賢しいことを……。（再び書を奪ひ取つて慧尺を打つ）出て行け。もうこの邸へ足踏はならぬぞ。」

慧尺「え。」

蝦夷「おのれ等の一人や二人、殺さうと生かさうと、蝦夷親子が心のまゝぢや。我々ほどの大きい力があれば、史の筆でも枉げさせて見するわ。行け、行け。」

慧尺（靜かに起ち上がる）「何事が御意に障つたか。御出入り差止めは是非もござらぬが、如何に大臣の威勢でも、史の筆は決して枉げられませぬぞ。歴史は鏡ぢや。醜う映るのがいやならば、己が姿を改むるより外はござりますまい。」

（慧尺は靜かに下の方へ去る。蝦夷はその後を見送るやうに、我にもあらで階段を降り來りて、書を開きながら、慧尺と同じやうに腰を掛ける。津輕と當麻は怖る〳〵その傍に寄り來る）

蝦夷「これ、悴も嫁もこゝへ來て、この書物のどこらあたりに、逆賊とか逆臣とかいふ文字が出てゐるか。もう一度見付け出してくれ。」（書を突付ける）

津輕「はつ。」（書をうけ取りて讀めども、容易に見當らず）

蝦夷（焦れる）「えゝ、まだ見付からぬか。もうよい、よい。」（書を奪ひて又もや床に投付ける）

津輕（あわてて書を拾ひ取る）「貴い書物を何故そのやうになされまする。」

蝦夷「おゝ、さうぢや、書物は誠に貴いものぢや。書物といふものがあればこそ、人の智慧も進み、世も進むのぢや。（津輕より書を受取る）俺がこれほど偉い人間になつたのも、父の餘光と、一つには書物のお蔭ぢや。」

當麻「それぢやに因つて、書物は何より大切なものぢやと、ふ

父　馬子。一一五頁參照。

だんから仰しやつてゐるではござりませぬか。」

蝦夷「俺は書物のお蔭で偉いものになつたが、又その書物が今は俺を苦しめる種ともなつた。（やゝ狂はしげに叫ぶ）俺も好んで學問をしただけに、かういふ時には心の苦みが人一倍に深いやうに思はれる。寧そ俺が無智か無學で、何にも判らぬ人間であつたら、どんな事をしても屹度平氣でゐられたに相違ない。そこが學問の貴いところで、又怖ろしいところぢや。俺も段々に年を取るにつけ、また一册でも多くの書物を讀むにつけ、何だか身の行末が危まれて、夜もおち〳〵眠られぬやうになつて來た。俺は書物にこれほどの怖ろしい力があらうとは思はなかつた。（苦しげに身を悶える）

津輕「しかし總べての書物が必ずさうとも限りますまい。」

蝦夷「それは勿論のことぢや。たとひどんなに苦しめられても、俺は書物の貴いことはよく知つてゐる。書物は世の寶ぢやと思つてゐる。しかし、俺にしろ、入鹿にしろ、所詮は人間ぢや。長い月日のうちには、自分の強いに任せて弱い者を滅したこともある。氣まゝな事もした。道に外れた事もした。それが、かういふ書物に一々記されて、逆賊――逆臣――謀叛人――と、千年も萬年も後の世に殘される。あゝ、思へば怖ろしいことぢや。」(思はず顫へて起ちあがる)(中略)

(雷激しく鳴る。下の方より葛城赤猪、あわたゞしく走り出づ)

赤猪「大臣、一大事でござりまする。」

蝦夷「一大事……。(階段より滑り落ちるやうに走り降りる)入鹿の身の上に異變があつたか。早く云へ。」

赤猪「入鹿の大臣が參内するを待受けて、豫て工みしものと覺しく、四方より不意に襲ひかゝつて、或は弓、或は劍、或は矛を以て大臣を取卷き……。」

蝦夷「して、それは何奴ぢや。」

赤猪「先づ中臣鎌足。」

蝦夷「中臣鎌足。」(呪ふやうにその名を呼ぶ)

赤猪「先刻これへ參つたる佐伯金麻呂が兄の子麻呂。」

蝦夷「佐伯子麻呂。」

赤猪「それがしの一族たる葛城網田。」

蝦夷「葛城網田。」

赤猪「『逆臣蘇我入鹿を誅戮する。』と呼ばはつて、遂に大臣の首を刎ね、屍は大庭に投棄てました。」

蝦夷(罵る)「日頃から蛇のやうな眼をして、我々の隙を狙う

中臣鎌足　中大兄皇子と謀りて入鹿を大極殿に誅す。後、孝德・天智の二朝に仕へ、大織冠を賜り、内大臣に進み、天智天皇の八(一三二九)年薨ず。年五十六。

てゐた鎌足の卑怯者め。獵夫が罠を張るやうなことをして、遂に入鹿を滅したか。あの金麻呂めは先刻おれ達を卑怯ぢやと云うたが、さういふおのれ等こそ日本一の卑怯者ぢや。（冷笑ふ）いや、さうでもせねばこの蝦夷親子は滅せまいよ。おのれ等はあつぱれ利口者ぢや。入鹿が既に討たれたからは、この父も安穩には棄て置くまい。やがて此處へも討手が向かふであらう。そち達は前後の門をきびしく固めて防ぎ矢の用意をせよ。」

赤猪「はつ。」（引つ返して去る）

蝦夷「入鹿は滅びた。さしも時めいた蘇我の一家も今日を限に滅ぶるのぢや。この上は未來の救を賴むより外はあるまい。（佛像を持出して戴く）親も逆臣、……子も逆臣、……執念深い怨靈のやうに長年俺を惱ましてゐた、逆臣とか逆賊とかいふ怖ろしい惡名が、とう〳〵俺達の上に降つて來た。俺の一生も、世間の人が思ふやうに、華やかな樂しいものでは決して無かつた。（寂しく笑ふ）いや、そんな愚痴を云つてゐるひまに、あの五つの庫の始末をして置かねばならぬ。」（蝦夷は奥に入る）（中略）

（赤猪は家來數人を引連れて居る。奥より蝦夷は劍を佩びて出づ）

蝦夷「赤猪、敵はまだ寄せぬか。」

赤猪「敵は法興寺の門前に勢揃ひして、雷雨の霽るゝのを待つて居りまする。」

蝦夷「その雷雨も、もう霽れた。」

赤猪「やがて押寄するでござりませう。」

（下の方より史の慧尺走り出づ）

慧尺「大臣、まだ無事でござつたか。入鹿殿が誅せられて、討手が向かふと聞いたから、取敢へず駈付けて參つた。」

蝦夷「我々親子を逆臣と呼ばうとてか。但しは外に仔細があつてか。」

慧尺「蘇我の一家の滅亡と共に、日本に二つとなき書物の數數を空しく失はんこと、惜しみてもなほ餘りあり。事無きうちに取出しに參つた。いざ庫の鑰をお渡し下され。」

蝦夷「いや、渡すまい。蝦夷が一生の間に蓄へた幾千卷の書物は、我が身と共に滅すのぢや。」

慧尺「や、さては書物を……。(驚きて駈寄る)たとひその身は滅ぶるとも、せめて書物だけは世に殘すが、國のため、人のためとは知られぬか。」

蝦夷「所詮逆臣の名を取つて滅ぶるからは、五つの庫に蓄へた和漢古今の貴き書物を悉く燒盡くして、日本の知識の世界を暗闇にするのぢや。唐土の書物は再び集る時節もあらうが、世に二つと無き日本の記錄は、今日を限に消えてしまふわ。」

慧尺「さきに物部守屋の滅びし時、古き記錄の半分は燒失ひたりと聞きたるに、殘る半分を今また失ふとは……。」

蝦夷「自業自得ぢや。我々を滅した報と知れ。」

(下の方にて轡の音聞ゆ)

赤猪「や、轡の音が近づきました。」

蝦夷「蝦夷が最期の邪魔せぬやうに、敵を門外にて喰止めよ。」

赤猪「はつ。」(下の方に去る)

慧尺「む、この上はたとひ百分の一なりとも、力の及ぶ限り取出して、書物を殘すがわが役目ぢや。」

物部守屋　尾輿の子。敏達天皇に仕へて大連たり。佛教の弘布に反對し、大臣蘇我馬子と爭ふ。用明天皇崩ずるや、守屋は穴穂部皇子を立てんとして馬子のために攻亡さる。

（慧尺は奥へ駈入らんとすれば、奥より火燄と共に黒煙渦巻き出づ。慧尺は煙を拂ひつゝたじろぐ）

慧尺（齒がみをなして）「えゝ、先刻からこゝに止つてゐたら、やみ〳〵と火は掛けさすまいものを……。五つある庫の内、まだ火の廻らぬものもあらう。（更に階段を駈降りて、上の方へ行かんとすれば、こゝの口よりも黒煙吹出づ）おゝ、最早火となつたか。」

蝦夷「五つの庫には殘らず火を掛けた。うろたへ騒いでも、もう遲いわ。」

（上の方より佐伯金麻呂、煙をくゞり出づ）

金麻呂「おゝ、慧尺殿。」

慧尺「すべての庫に火が掛つたか。」

金麻呂「庫は勿論、奥は凡て一面の焔ぢや。迚も寄り著かれぬ。」

慧尺「むゝ、」

（奥にて凄じき音聞ゆ）

蝦夷（上の方を見る）「おゝ、第一の庫が落ちた。」

（慧尺は落膽して床に坐す。金麻呂も口惜しげに上の方を見返る）

蝦夷「第二の庫もつゞいて落つるわ。あれ、第三も……、第四も……。あの火が消ゆれば日本は闇ぢや。はゝゝゝゝ。」

（奥より黒煙盛んに吹出づ）（幕）（岡本綺堂―「綺堂戲曲集」による）

六月丁酉朔甲辰、中大兄密謂倉山田麻呂臣曰、「三韓進調之日、必將使卿讀唱其表。」遂陳欲斬入鹿之謀。麻呂臣奉許焉。戊申、天皇御大極殿、古人大兄侍焉。中臣鎌子連、知蘇我入鹿臣爲人多疑、晝夜持劍而敎俳優方便令解。入鹿臣咲而解劍、入侍于座。倉山田麻呂臣進而讀唱三韓表文。於是中大兄戒衞門府、一時俱鎖十二通門、勿使往來、召聚衞門府一所、將給祿。（日本書紀）

岡本綺堂　劇作家。名は敬二。明治五年東京に生まる。

參考資料

日本書紀　三十卷。元正天皇養老四（一三八〇）年五月成る。舍人親王・太安麿・紀清人等勅を奉じて撰す。神代より持統天皇の朝までの傳說・歷史を漢文にて記せり。參考書には、

卜部兼方「釋日本紀」
谷川士清「日本書紀通證」
河村秀根「書紀集解」
飯田武鄕「日本書紀通釋」

八　純ぶる心

遠き遙かな寧樂の世、我等の祖先が營んだ生活の上に思を馳せる時、湧然として生じ來る問題は、萬葉人が如何にして調の高く素朴なる歌を詠み出したか、また古今和歌集以後の歌風が、或は優美であり典雅であり、或は華麗であり纖巧であり、或は理窟を交へ遊戯に走つて、萬葉集と著しい相違を生じたのは何故であるかといふことである。

萬葉集を理解し、その歌風を鼓吹することに於て第一人者であつた賀茂眞淵は、新學に、「古の歌は調を專らとせり。謠ふものなればなり。その調のおほよそは、のどにも、あきらにも、さやにも、おのがじし得たるまに〳〵なるものの、貫くに高き直き心をもてす。」と言つてゐる。そのおのがじししえたるまに〳〵詠んだ歌が、高く直き心を以て貫かれてゐることは、萬葉歌人中の尤である柿本人麿と山部赤人との歌を比較すればよく分る。

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けばこゝろもしぬに古おもほゆ　柿本人麿

久堅の天見る如く仰ぎ見し皇子の御門の荒れまくを惜しも　同

和歌の浦に潮みちくれば潟を無み蘆邊をさしてたづ鳴き渡る　山部赤人

春の野に菫つみにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜寢にける　同

人麿の調は豪放嚴格であり、赤人の調は平淡清楚である。すべて萬葉集の歌は作つた歌ではなくて、心の底から個性

參考資料

萬葉集　二十卷。撰者不詳。仁德天皇の朝より淳仁天皇の朝に至る四百餘年間の和歌四千四百九十六首（短歌四千百七十三、長歌二百六十二、旋頭歌六十一）を漢字の音訓もて記錄せるもの。

參考書には、

仙覺律師「萬葉集抄」
僧契沖「萬葉代匠記」
賀茂眞淵「萬葉考」
橘千蔭「萬葉集略解」
鹿持雅澄「萬葉集古義」
木村正辭「萬葉集美夫君志」
次田潤「萬葉集新講」
井上通泰「萬葉集新考」
佐々木信綱「校本萬葉集」
同「萬葉集選釋」
武田祐吉「萬葉集新解」
辰巳利文「大和萬葉地理研究」
川村悅麿「萬葉集傳說歌考」

古今和歌集　一四八頁參照。

賀茂眞淵　國學者。遠江の人。荷田春滿の門人。田安宗武に仕ふ。明和六（二四二九）年歿す。年七十三。

新學　一卷。賀茂眞淵の著。萬葉調の歌風を高唱せるもの。

柿本人麿　傳未詳。持統・文武兩朝に仕へ、石見にて歿す。

山部赤人　傳未詳。聖武天皇に仕ふ。心もしぬに　愁ひ萎えて。

のまに〳〵滲み出した歌である。旅人の虚無的なる、憶良の思想的なる、多くの女性歌人の情熱的なる、それ〴〵に特色を有して、決して自己を僞らない。その生活を敍しては、

世の中はむなしきものと知る時しいよゝますゝ〳〵
悲しかりけり　大伴旅人

世の中を憂しと恥しと思へども飛立ちかねつ鳥にしあらねば
山上憶良

といひ、旅を歌つては、

家さかり旅にしあれば秋風のさむき夕べに雁なき
わたる　柿本人麿

家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉
にもる　有間皇子

こゝにして家やもいづく白雲のたなびく山をこえて來にけり
とよみ、自然を寫しては、

わたつ海の豐旗雲に入日さしこよひの月夜明らけくこそ
天智天皇

吉野なる栞摘の川の川よどに鴨ぞなくなる山かげにして
湯原王

といふ。皆、眞淵の所謂、のどにも、あきらにも、さやにも、おのがじしえたるまに〳〵詠みなした歌である。しかも其處に一貫して存する萬葉集獨自の特質を一言にて表はすには「純ぶる心」といふ言葉が最も適切であると思ふ。

歌は人の心の流露である。殊に情の發露である。隨つて或同じ時代の歌を數多く讀味はふ間に、その時代の歌人の心情を知ることが出來る。この純ぶる心といふ語も、萬葉集全

旅人　大伴旅人。安麿の子。持節大將として隼人の亂を平げ、太宰帥となり、大納言に進み、天平三(一三九一)年薨ず。年六十七。

「この世にし樂しくあらばこむよには蟲に鳥にもわれはなりなむ」

憶良　山上憶良。大寶三年入唐し、慶雲元年歸朝す。聖武天皇の朝筑前守に任じ、天平五(一三九三)年歿す。年七十四。

「瓜食めばこども思ほゆ栗食めばましてしぬばゆ何處より來りしものぞまなかひにもとなかゝりてやすいしなさぬ

反歌

白がねもこがねも玉も何せむにまされる寶子にしかめやも」

女性歌人　衣通姫・額田女王・石川郎女・碁檀越妻・大伴坂上郎女・笠郎女等。

有間皇子　孝德天皇の皇子。齊明天皇の朝(一三一八)に死を賜はる。年十九。

豐旗雲　大きく美しくたなびける雲。

天智天皇　舒明天皇の皇子。中大兄と稱す。蘇我入鹿父子を誅す。冠位の制を改め、令を撰ばしむ。近江宮にまします。在位十年。壽五十八。

栞摘の川　奈良縣吉野郡。吉野川の上流。

湯原王　施基太子の子。

般の歌から直感した萬葉歌人の心の姿であつて、心が何等の制約を蒙らず、潑剌として動き得る狀態に置かれたのをいふのである。勿論、純ぶる心は情熱ではない。健全な心の姿であつて、心の中に矛盾撞着が生じ、自分で自分の心を如何ともすることが出來なくなるやうなものではない。

人は理性の力が行爲を規定し感情を規定するやうになると、思ひのゞめることが多くて、感じのまゝに純ぶるに迸ることが少くなる。併し萬葉集では、純ぶるなことが本來であつて、思ひのゞめることや、理性が心を主宰することは本來ではない。ところが平安朝の文學は、思ひのゞめることや、理性が心を主宰することが本來の姿であつて、純ぶるなことは却つて上品ならぬこととされてゐる。

年の内に春はきにけり一年を去年とやいはむ今年

とやいはむ　在原元方

袖ひぢて結びし水のこほれるを春たつけふの風や

とくらむ　紀貫之

吹くからに秋の草木のしをるればうべ山風を嵐と

いふらむ　文屋康秀

第一の歌は、切迫した純ぶるな感情ではない。餘裕のある心持で、天の春と人の春との矛盾に一種の面白さを感じたものである。歌は人の心の眞情を詠んだのをよいものとするならば、この歌はよい歌とはいはれない。次の歌は、一年の經過を一首にいひ盡くした所が妙であると古の人は稱美したのであるが、これも理窟が大分はひつてゐて、印象の鋭さがない。第三の歌は、殊に文字の上の遊戯である。しかも機智ともいへないし、ユーモアでもない。たゞ理窟で考へたの

在原元方　在原業平の孫。

紀貫之　一四八頁參照。

文屋康秀　宗于の子。清和・陽成の兩朝に仕へ、元慶三(一五三九)年縫殿助となる。

ユーモア　上品なる諧謔。Humor.

であつて、智を働かした文學として見ても、また面白くもないし鋭くもない。かくの如き類は古今和歌集には甚だ多いのである。勿論古今和歌集及びそれ以後の歌にも優れた詠は數多くある。いつの時代にも、よい歌に感ぜらるゝ所は眞情である。この眞情は萬葉集のみにあつて他に存しないといふのではない。たゞ萬葉時代の純ぶる心が、平安朝に於ては物のあはれに變つて來たやうに、その眞情の色や調子が、時代によつて變化するといふのである。隨つて又よい歌の調子も次第に變つて行くのである。古今和歌集の中でも、

久方の光のどけき春の日にしづこゝろなく花の散らむ　紀友則

の如きは、萬葉集の時代には無かつた歌風で、しかも亦極めて優れた歌である。友則がこの歌の題材を感ずる時に、光も

紀友則　延喜の初、大内記に進む。古今和歌集撰者の一人。

長閑な春の日に、何故靜かな心もなく花は散つて行くのであらうかといふ、その疑問の持方は、いたく思索的であるが、かの「年の内に」「袖ひぢて」の歌のやうに理窟に墜ちないで、詩歌としての純粹さを保つて居る所以は、この歌の題材となつた認識が、思索をも中に取入れてゐるからである。はかなさを感じさせる現象に對して、鋭敏に感じる哀感が、この歌の中心であらうが、かゝる感情は、散る花にもはかなさを感じることが基となつて、始めて發動する。しかもかうした思索を中に含めながら、全體として破綻のないやうになし得た所が、その歌の生命である。而してその推理と、その哀感とをよく一首の中に收めた作者の心は、ゆとりのある靜かな心である。こゝに物のあはれを生む心の姿がある。所謂、平安朝のつくづくと眺める態度である。春の花、秋の月に對して、

思索　理路を辿りて、思想をめぐらすこと。

認識　心が知力作用によつて、對象を在るがまゝに會得すること。

一日一夜をも眺めつくす態度である。平安朝の物語の根本が、この眺める生活を描くにあつた如く、又平安朝以後長い間の和歌は、この眺める態度から生まれたのであつた。

かやうに考へると、古今和歌集の歌は、そのよきものは思索の交はる爲に萬葉集の及ばぬ所を開き、その悪いものは思索の交はる爲に失敗を招いてゐる。物のあはれを感ずる心は、思索の力、理性の力を多分に混じたもので、隨つて感情が動かず、低徊しがちな心である。それが更に進むと、遂に心の中に分裂乖離が生じ、自分で自分を如何ともすることの出來ない世紀末的氣分となるのであらう。

しかし萬葉人の面目は、さうしたものとは全く異なつてゐる。「家さかり」の歌を見ても、作者は心に鋭くも強くも深くも、又しみ〴〵とも旅の秋の夕べを感じて、その時に鳴きわ

世紀末的氣分　物質主義その極に達し、生存競爭はげしく、人々は神經過敏になり、煩悶・厭世の傾ある狀態。

たる雁の聲に、一層その情を切實にせしめられたのである。而して、その印象がそのまゝ歌に詠まれてゐる。其處には些の理窟も含まれてゐない。感じたことをそのまゝ率直に詠んでゐる。これが萬葉人一般のものの感じ方である。

萬葉歌人の時代には、自由にありのまゝの感情を表白することを、正しからざることと見る倫理觀は存しない。現世を賴みとするからに、それを無價値のものと見なす無常觀も存しない。また詩作に對して懷疑を持つやうな態度も何もない。卽ち一部の佛教の影響を除いて、萬葉人の全體的思想は至極健全で、生活を暗くさせ、感情の表白を手加減させ、人生に對して無常を感じさせ、自己の生存といふことに懷疑や思索的懊惱を持たせるやうなことは何もなかつた。それが萬葉人の思想である。かくの如き思想は却つて自己の

心を自由に歌はせ自由に表白させたのである。

萬葉集の歌風の素朴剛健であることは、この純ぶる心ではない。純ぶる心とは根本的な態度であつて、歌のもつ色合ではない。萬葉の歌が素朴剛健と感じられる所以のものは、その感情が後世の如くに纖細さを有してゐない爲である。萬葉集以後に於ては、人々の感受性は皆一層洗煉を加へ、纖細な感じ方をするやうになり、感傷的になり、また感覺的になり、低徊的になつて來た。この傾向は勿論、萬葉の末期には既に生じつゝあつたのである。

わが宿のいさゝむら竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも　大伴家持

の如きは、人麿などの詠に比べて驚くべく洗練され、纖細になつた心で歌はれてゐる。また著しく優しくなつて、ともす

感傷的　感じ易く、涙もろきこと。

大伴家持　旅人の子。聖武・孝謙の兩朝に歷仕し、中納言、持節征夷大將軍となる。延曆四(一四四五)年歿す。

「劍太刀いよゝ磨ぐべし古ゆさやけく負ひて來にしその名ぞ」

「ますらをは名をし立つべし後の世に聞きつぐ人も語りつぐがに」

「すめらぎの御代榮えむと東なるみちのく山にこがね花咲く」

ると感傷的に落ちようとする傾がないではない。主觀も一むきに流れずに、反省的な態度が加つてゐる。纖細な心、洗煉された心、どこかあてやかで弱々しい心は、低徊趣味を伴なふものである。それに對して、健全剛强な心は低徊的でなく、隨つて粗野で强い所がある。健全で純ぶるでありながら、しかも纖細優雅であるといふことは、甚だ難いことであると思はれる。純ぶる心と素朴剛健、物のあはれと低徊優美といふことは、自然に一つの必然的關係のやうになつてゐる。

洗煉と優美とを犧牲にして純ぶる心のまゝに歌はれた萬葉集の歌は、我が國詩歌の最古にして最初の定型を築いたものであつた。文學の定型を生み出し得る程の文化を有しながら、なほ純ぶるまゝに歌つた所に、萬葉人の心の純粹さが存してゐる。詩經の倫理的で、詩篇の宗教的なるに對し、

詩經　支那上代の詩集。もと三千餘首ありしに、孔子刪りて三百十五篇とす。

詩篇　舊譯全書の一。約五十篇の詩集にて、おほむね神德を讃美せり。

萬葉集は實に純眞素朴の自然人の歌である。萬葉集はかくの如き意味に於て世界に誇り得べき我が文學史上の金字塔として永久に聳ゆるであらう。（佐佐木信綱の文に依る）

大海の磯もとゞろによする波われて碎けてさけて散るかも（源實朝）

大魚つる相模の海の夕なぎにみだれて出づる海士小舟かも（賀茂眞淵）

父のみの父いまさずて五十年に妻あり子ありその妻子あり（楫取魚彦）

霞立つながき春日を子供らと手まりつきつゝ今日も暮しつ（良寛和尚）

たのしみは稀に魚煮て兒等皆がうまし〳〵といひて食ふ時（橘曙覽）

いたづきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ（正岡子規）

佐佐木信綱　文學博士。歌學者。三重縣の人。明治五年生まる。東京帝國大學古典科の出身。東京帝國大學講師。

源實朝　鎌倉三代將軍。承久元（一八七九）年、鶴岡八幡宮にて弑さる。年二十八。

楫取魚彦　國學者。下總の人。賀茂眞淵の高弟。天明二（一七八二）年歿す。年六十。

良寛和尚　歌人。越後長岡藩士。天保二（一八三一）年歿す。

橘曙覽　歌人。福井の人。田中大秀の門人。明治元年歿す。年五十七。

正岡子規　俳人・歌人。松山市の人。明治三十五年歿す。年三十六。

九　大和國原

わが上代文學には、日本群島に居住してゐた諸民族の間に發生し生育した所の文化の痕跡を止めて居る。しかし古代に於てその諸民族が未だ溶合せずして、各地に分布して居た時に當り、大和の國に居を占めてゐた所謂大和民族の間には、既にその固有の文化が釀成せられてゐたので、その文學が遂に國文學の主流をなすに至り、爾來悠々三千年、わが國文學史を貫流したのである。かくて大和の國は永い間の文化の中心地となつた爲に、上代文學に關する文獻は殆どこの地に於て成立したのである。

神武天皇が皇居を橿原の地に奠め給うてから、千三百數十年、歷朝おほむね高市・十市・磯城の三郡の中に都せられて、

高市・十市・磯城　大和の中央部にある郡名。

他郷に移つたことは寧ろ稀であつた。當時の皇居は一代ごとに處を異にして宮殿を營んだのであるから、その造營も簡單であつた。皇居の所在地は必ずしも都邑を形成するのではなく、國民が集團をなして點在した聚落に過ぎなかつた。故に皇居はその集團の散在してゐる範圍内に於て移動したのである。かくて泊瀨・飛鳥・曾我の三川の流域に居住した人々の間に原始文藝は養育せられたのである。泊瀨川・飛鳥川などの流域は、昔と今とは異なるであらう。これらの川は土砂を押流すので、大雨の後にはもとの河床が高く涸れて、あらぬ處に濁流の漲るのが常であつて、飛鳥川の淵瀨は古來變り易きものとせられてゐたのである。香具山の麓に海原の如き埴安の池のできたのも、それは多武峰から流れ落ちる倉梯川のいたづらであつたであらう。

泊瀨川　源を磯城郡上之郷村に發し。初瀨町の南を經、三輪山の南麓をめぐり、奈良平野に出でて大和川に入る。
飛鳥川　源を高市郡高市村に發し、飛鳥村を經て大和川に入る。
曾我川　飛鳥川の西方にあり。飛鳥川に並行して大和川に入る。
埴安の池　今は香具山村大字南浦にその跡あり。
多武峰　磯城郡にあり。
倉梯川　寺川の一支流。

飛鳥川の東に天の香具山・耳成山、西に畝傍山があつて鼎立してゐる。いづれも平野の中に孤立した美しい小山である。畝傍山はやゝ形が鋭い。その附近は昔から森林であつたと思はれる。耳成山は形がなだらかである。古來梔子の樹を以て有名であるが、今も猶存してゐる。天の香具山はその背後に高い山を控へてゐるので、やゝ目立たない。然し古代から最も人事と交渉の多い山で、神事にはこの山の眞榊を根こじにし、又この山の土を取つて齋瓮を作つたのである。

この三山の地が古代文化の中心地であつた。更に東方には三輪山から續いて、泊瀨の山々が聳え、南には多武・高取の山、西方には葛城の連嶺が雲を凌いで、大和川を隔てて北方の生駒山脈に連なつてゐる。また多武・高取の彼方には吉野川を隔てて吉野の群山がそゝり立つてゐる。たゞ北方のみ

梔子　茜草科に屬する常綠灌木。夏、六裂の白色花を開く。赤くして黃ばみたる六稜の實を結ぶ。
齋瓮　神事に用ふる甕。

はやゝ開けて奈良・郡山の平原を控へてゐるが、それもその末は奈良山が霞をひいて遮つてゐる。かやうに四方山を以て圍まれた土地であるから、氣候は溫和であるが、寒暑の差はやゝ激しい。昨日まで青葉に茂つてゐた山も、一夜の雨に黃葉してしまふやうに感じられることも少くない。併し京都ほどの氣象の激變はなく、雨量は少く、風もさして烈しくはない。晴れて雲の退くまゝに仰ぎ見れば、遙かなる吉野山に今朝は雪の白きを見る。月は卷向の弓月が嶽より出でて、玉くしげ二上山に沈む。この平和の鄕に古聖帝は皇居を奠められたので、そこに住む人々の溫和な心は、そのかみの埴輪の目鼻にも偲ばれるのである。

元明天皇の和銅三年、天皇は都を最北の奈良平原に遷して、こゝに平城宮を造營せられた。爾來七代七十餘年の間、こ

卷向の弓月が嶽　卷向は磯城郡に在り。弓月が嶽・穴師山などはその一山なり。

玉くしげ　「み・ふた・あく」などの枕詞。

二上山　今は「にじやうざん」と呼ぶ。奈良縣と大阪府との境にあり。

七代　元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱德・光仁の七天皇の御代。

の地は帝都として榮えたのである。この南方は大和川を隔てて飛鳥・藤原の平野に接し、東には春日山・高圓山があり、佐保川はその溪谷の水を併せて、南流して大和川に注ぐ。北は奈良山を隔てて山城の國に接し、西は生駒の山脈を以て河內國に隣してゐる。その氣象や風光は三山の地と大差はないが、時の人は山遠き都と稱して、天空の開濶を喜んだのである。もゝしきの大宮人は佐保の內に邸宅を連ねて、馬醉木散る高圓の野邊に遊び、大君の三笠の山の親しき姿を仰ぎ見つゝ、ひたすら唐代の文物の移入に努めた。この間に古事記・日本書紀は成り、懷風藻は編せられ、律令は再び改修せられた。萬葉集の前身である多くの家集も、恐らくはこの時代の前半に成つたのであらう。時に都を山近き恭仁の宮、難波の京に移したこともあつたけれども、それも一時で、またも

高圓山　春日山の東南に並ぶ。添上郡に屬す。

佐保川　添上郡佐保村に發し、佐保山の麓を流れて大和川に入る。

古事記　四八頁參照。

日本書紀　七九頁參照。

懷風藻　五五頁參照。

律令云々　天武天皇の定め給ひし所に基づきて、大寶年間に大寶律令を定められ、養老年間に之を修正せり。

恭仁　相樂郡木津町の古稱。桓武天皇、一時こゝに都を遷し給へり。

難波　仁德天皇こゝに都し給へり。

この平城の京に還つた。時代はもう都を遷すには餘りに面倒な事情を伴なふやうになつてゐたのであらう。

青丹よし奈良の都は咲く花の薫ふが如しと歌はれてゐる。香具山のふりにし里は鶉鳴く里と荒れたけれども、夏草の茂みを分けて草深百合の花咲みに咲ますを尋ぬる人もあらう。それより高取の山を越ゆれば、山峽の間を流れて吉野川は遠白く西に走る。後の吉野朝の花は山上であるが、萬葉人の遊んだところは川の畔であつた。鮎子さばしる瀧つ河内に離宮を建てて行幸せられたのは隨分昔からのことで、天武・持統以後も屢〻この宮に行幸せられた。

萬葉集頃の人々の通路は、葛城山の麓なる巨勢の野を通つて吉野川の溪谷に出た。それより下り眞土の山を越えて紀伊の和歌の浦へも出た。難波への往還は、奈良からは生駒

青丹よし云々　一〇六頁參照。

眞土の山　奈良縣と和歌山縣との境にあり。吉野川の北岸に當る。

山脈を越えた。峰の上に匂へる花を仰ぎ見つゝ、風な吹きそと龍田の神に言擧げして峠に出れば、かゞやく難波の海は眼の前に廣げられて、遣唐の船舶も、その岸の住吉の神を祈つて眞楫しゞぬき漕ぎわかれたのである。奈良より北へ奈良坂を越えれば、泉川の清流は鹿背山の間を流れて來る。さざなみの近江の國へはこれから通ずるので、北國への旅には必ず越えねばならぬ峠であつた。

大君のまします時は卽ち都であるが、天皇の御心が一旦その地を離れて北へ奈良坂を越え給へば、さしもとことはにと思ひ定めて造られた奈良の都も、いつしか衰へて僅にその東部のみが興福寺の勢力の下に殘つた。これが現在の奈良市である。

立ちかはり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひ

龍田の神　生駒郡三郷村にある龍田神社。今は官幣大社なり。風神を祭る。

住吉の神　大阪市住吉區にある住吉神社。今は官幣大社。

しゞぬく　繁く連なる意。

鹿背山　相樂郡鹿背山村にあり。

立ちかはり云々　田邊福麿の詠にして「やすみしし吾が大君の高しかす日本の國は云々」の反歌なり。福麿は天平の頃の人。

にけり

これは天平の中ごろに、都を一時奈良から山城の恭仁に移した當時の作である。今の奈良に旅する人は麥圃の間にそのかみの平城宮の大極殿の礎石の遺跡を見て、また同じ感慨に浸るであらう。併し工作物は亡びても、いにしへ人の生活の蹤は儼として今も殘つてゐる。古人の殘した文藝の力はたやすく吾人の心の上に古人の心を呼起さしめる。文化の故郷を偲び祖先の心情を懷かしむ者に取つては、大和の國の一草一石も意味ある存在である。

（武田祐吉―「上代日本文學史」による）

み民われいけるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく
思へば（海犬養岡麿）
敷島のやまとのくには言靈のさきはふ國ぞまさきくあ
りこそ（作者未詳）

武田祐吉　國文學者。東京の人。國學院大學教授。

海犬養岡麿　傳未詳。

一〇　正倉院拜觀記

正倉院の御蟲干で、御物の拜觀が出來ると聞いて、京都からは、日歸りで樂に行けるのであるが、少し外にも見物したい處もあるので、前日から出掛けて行つた。

夜奈良の町を歩いて見ると、至極靜かで、旅宿から興福寺内を拔けて、猿澤の池へ出るまで、人一人出遇はない。鹿の聲が聞えるかと耳を澄ましてみたが、どうした譯か少しも聞えない。翌朝は五時半に起出て、春日の森を散歩した。すると、今朝は鹿の聲が彼方此方で五月蠅いほど聞えた。春日神社は修繕中で中に這入れないから、玉垣の外から遙拜し、手向山八幡宮・三月堂・二月堂・鐘樓・大佛殿と順次に見物して、一先づ旅宿に歸り、朝餉を認めてから正倉院に出向いた。

參考資料

正倉院御物寫眞帖（帝室博物館）

正倉院　聖武天皇の御遺物を始め天平時代の美術工藝品三千餘點を納む。正面十八間八寸強、奥行五間一尺二寸、高さ五間、床下九尺、寄棟造、本瓦葺の木造建築。

鐘樓　東大寺の鐘樓。

大佛殿　東大寺の大佛殿。

平城舊都一條大路に當る景清門を拔けて、大佛供養の時、惡七兵衞景清が此の門に潛んで、將軍賴朝を討たうとしたといふ傳說を思ひ出し、間もなく正倉院に着いて控室に上がると、雷名四海に轟く某將軍が來て居られた。博物館長の紹介で將軍に名告を揚げ、頓て係官の先導で驥尾に附して御物拜觀を始めた。先づ立派に螺鈿の裝飾を施した琵琶・阮咸等の樂器を見て、細工の精巧に一驚を喫し、聖武天皇の御使用の仕込杖と聽いて、千二百年以前既に此の工夫があり、而も現今の物に優るとも劣るまじき裝置に再驚を喫した。將軍は此の仕込杖に深き興味を寄せられ、石突の工合に注意し、刀身の諸及なるか、片及なるかを確め、銘の有無、目貫の孔の數を質し、柄に鮫皮が用ひてあると聽き、當時の工藝の進步に驚かれた樣であつた。それから蒔繪の碁盤、硬玉及び

景清門　碾磑門ともいふ。東大寺の北西隅の門。八脚門にて本瓦葺。建久年間に大佛供養に際し、平景清この門に隱れて源賴朝を窺ひしといふ。近松門左衞門の「出世景清」はこの傳說を綴りしもの。

某將軍　陸軍大將乃木希典。

驥尾に附す　王子淵の四子講德論に「夫蚊蝱終日經營、不レ能レ越二階序一。附二驥尾一則涉二千里一、攀二鴻翮一則翔二四海一」

琵琶・阮咸　共に樂器の一種。挿繪參照。

聖武天皇　文武天皇の太子。佛を信じ、在位二十五年にして薙髮し勝滿と號す。後八年（一四一六）にして崩ず。御壽五十六。

石突　杖の地を突く端。多くこゝに金具・角などを嵌む。

銘　作りし人の名を刻せるをいふ。

正倉院御物

赤珊瑚の碁石、鳥毛屏風の下繪等、いづれも目を驚かす物ばかりであつたが、分けても金銀珠玉を鏤めた鏡類の燦爛目を奪ふ立派さ、見事さ。中にも一面七寶の裝飾を加へた鏡は、外國人が垂涎する程の世界の逸品であるさうだ。

聖武天皇の御寢臺は、長さと云ひ、幅と云ひ、實に大きな物であつたが、將軍は委しくその寸法を測つて居られた。中倉の二階には、刀劍・弓矢・槍戟の類が澤山にあつた。これは惠美押勝の亂に用ひられた物であると云ふ。普通の觀覽者は一通り目を通しただけで、さつさと過去つて仕舞ふのであるが、將軍は職掌がらこれにも特に綿密な注意を拂はれた。先づ長槍の柄の卷方、石突の工合を仔細に點檢され、刀劍類の細部を逐一取調べて、「後世今日に至るまでの種類は、天平時代に一つも缺けて居ない。」と語られた。それから弓矢に就い

目貫　刀身の櫛より拔け出ささるやうにとめたる目釘。

七寶　金・銀・瑠璃・頗梨・珊瑚・碼瑙・硨磲の惣稱。

中倉　正倉院は內部が三つに分れたり。その中部。

惠美押勝の亂　淳仁天皇の朝藤原仲麿に惠美押勝と賜ふ。押勝は孝謙上皇の寵厚かりしが、僧道鏡の寵ぜらるゝに及びて亂をなし、敗れて斬らる。時に淳仁天皇八(一四二四)年。年五十九。

天平時代　聖武・孝謙・淳仁・稱德の四天皇の御代に、天平二十一年、天平感寶一年、天平勝寶八年、天平寶字八年、天平神護三年あり。この間に佛教興隆し、美術工藝の進步著

ては、「矢の羽根は二枚か。」と問はれ、「二枚のも、その他如何なる種類のもあり、鏑矢までも備つてゐる。」と係官が答へると、「それでは雁股の矢の根があるか。雁股ならば四枚羽の筈である。」と問はれた。係官は又何れもさうある旨を答へた。聽手も聽手なら、答手も答手で、この故實上の問答は、實に意外の聽物で、傍聽する我々は思はぬ新知識を授けられた。將軍の用意周到なことは、專門の武具・馬具に限らず、何事に懸けても非凡であつて、錠前の種類、唐櫃の蓋の厚みにも目を留められ、經筒の構造に至るまで、細密な觀察を遂げられて、その質問の細かいこと、並大抵の係官では答辯に困るだらうと思はれる位であつた。併し我々の先導者は、八年以上この御蟲干のために、東京から年々出張すると云ふ老練家であつたから、如何なる質問に逢つても淀みなく答へるので、聽いて

し。世にこの時代を天平時代といふ。

居ても心持が好かつた。

次に箜篌と云ふ樂器は、西洋の竪琴に似たものであると、豫て聞いて居たから、特別の興味を以て見たのであるが、何樣よほど珍らしいものであつた。支那人が此の箜篌や阮咸を見て、「此等の樂器は書物の上で見るばかりで、實物を見るのは今が初だ。」と云つて感歎するさうである。この外、東羅馬帝國の遺物と云はれる玉・水晶乃至玻璃の器具や、唐櫃の外部にある密陀繪の如きも、また全世界に類の無い逸品ださうで、西洋の博物館にこの類があつても、何れも土中から發掘した品であるから、見る影もなく破損されて居るが、正倉院の御物は、これを一つ取出して見せられたら、迚も千年以上の星霜を經たものとは思はれないほどの鮮かさであつた。最も不思議に思はれたのは、矢竹や筆の軸に少しも蟲喰

箜篌　一名百濟琴といふ。挿繪參照。

密陀繪　酸化鉛に色を加へて描きたる繪。密陀は密陀僧の略、酸化鉛のこと。

の痕がなく、料紙も天平時代の物が今新しく漉上げられたばかりの有樣で保存されて居ることであつた。これは奈良の土地が乾燥してゐるのと、校倉の構造が宜しいのと、手入の行屆く爲とであらう。うが、一時は隨分投遣りにされて、乞食が緣の下で焚火をしたといふ噂もあるし、落雷の痕も歷々と存して居る所を見ると、實に一の奇蹟である。これも偏に世界に無比な萬世一系の我が皇室の御稜威の彌高きを示すものであつて、これこそ我々が宇內に向かつて誇り得る一大寶庫であらう。（藤代禎輔―「文藝と人生」による）

青丹よしならのみやこは咲く花のにほふがごとく今さかりなり（小野老）

菊の香や奈良にはふるき佛たち（芭蕉）

奈良七重七堂伽藍八重櫻（同）

校倉　三角形の木材を、稜角を外にして井桁に組みあげて造りたる倉。

藤代禎輔　千葉縣の人。文學博士。京都帝國大學教授。昭和二年歿す。年六十一。

小野老　傳未詳。

芭蕉　俳人。伊賀の人。正風の祖。元祿七（一三五四）年歿す。年五十一。

一一　法隆寺

法隆寺の金堂にはいつた。明るい處から急に暗い處にはいつたので、初の間は何も見えぬ。漸くにして印度佛のうしろが見えて來る。眞四角な天蓋が見えて來る。段々と樣々な佛體が見えて來る。

案內者は壁の方を向いて、この壁畫は朝鮮の僧某が聖德太子の命を受けて書いたものだといふ。唯眞黑な壁と思つてゐたが、成程壁畫がある筈だなと眸を据ゑて暗中を見ると、暫くして纔にそれらしいものが目に入る。よく見て居ると、頭らしいもの、顏らしいもの、手らしいものなどが段々見えて來る。人間よりも稍〻大きい位に畫かれて居る佛樣が澤山あるのであつた。案內者は、この彩色のうちの丹いのは珊

參考資料
法隆寺大觀（法隆寺）
日本帝國美術略史（帝室博物館）

法隆寺　奈良七大寺の一。推古天皇十五年、聖德太子建立。

壁畫　筆者は未詳、鞍作部鳥ともいひ又は高麗の僧曇徵ともいふ。聖德太子　一一一頁參照。

瑚末だといふ。彩色があるのかと更に凝視すると、成程彩色がある。纔に碧い色が見える、丹い色が見える。其處ばかりをぢつと見て居ると、乏しい光線も自らこれのみに集つて來る。

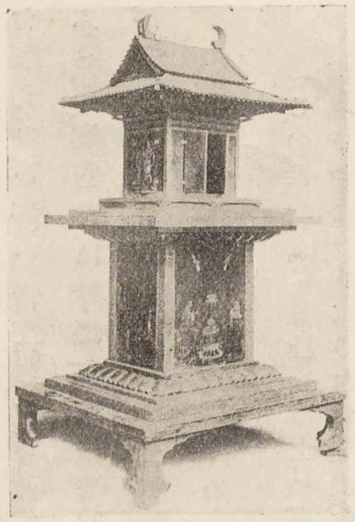
金堂の壁畫

のかと思ふやうに、段々其處が明るくなつて來て、その丹碧の色は浮出るやうに目に入る。

固より千年以上の歳月を經た畫だ。剝げて居る。燻つて居る。輪郭さへ明かでない。それに拘らず、その丹碧の色は鮮かに目に入る。千年の古色を呈してなほその中に鮮明な光を湛へて居る。余は生をこの世に享けて以來、未だかゝる重みのある、そして鮮明

な色を見たことが無い。その筈だ、珊瑚を粉にした珊瑚末が壁土同樣、惜しげも無く磨りこんであるのだもの。

余はそれから玉蟲の厨子も見た。印度佛も正面に廻つて見た。天蓋も凝視した。佛體も一々見た。何れにも恍惚として目をつぶつたが、併しこの丹碧の色ほど強く心を刺戟したものは無かつた。



玉蟲の厨子

それから金堂を出て夢殿の廊下を通つて居る時、りん〳〵〳〵と物が鳴つた。案内者が、「あの鈴は金鈴といつて、黃金を澤山に入れて拵へた鈴ださうです。」といつた。その音の好さと云つたら喩へようにも物が無い。この法隆寺にあるどの佛體を叩いても、

夢殿　八角造にて、高さ三丈九尺。方九間二尺。天平の創立のまゝに存す。

あんな好い音は出まい。極樂淨土で啼くといふ伽陵頻迦の聲も恐らくかうまではあるまいと思つた。それから廊下を傳つて寶藏の方へ行きかけると、又りん〳〵と鳴つた。あゝたまらない好い音だと立ちどまつて耳を澄ました。この時ふと、今、案内者は鈴だと云つたが、もし彼の金堂の壁畫の色が音を出したのではあるまいかと疑つた。

蘭の香も法隆寺には今めかし　（高濱虛子―「俳諧一口噺」）

この世からなる極樂淨土を現じ、懺悔滅罪して平和の春を出現させようとなされた聖德太子・聖武天皇の御理想は高遠洪大であつた。これを現實化なされたのが天平時代である。然し、その理想の權化であつた盧舍那佛でさへも度々の劫火にあひ、七大寺の大伽藍も多く荒廢に歸して、遂に平和の春は久しかるを得なかつた。けれども人間歸趨の目的は茲に在る。人類は我執の偏見に囚れることなく、世界を擧げて齊しく平和の春を樂しむべき時が到來せねばならぬ。（笹川臨風の文による）

高濱虛子　俳人。名は淸。明治七年松山市に生まる。雜誌ホト、ギスの主幹。

一二　聖德太子

若草萌ゆる如月の頃、大和路なる斑鳩の宮には、時ならず天下の貴顯が集ひ集うて、哀惜の叫は遠く垣外にも漏れ、哭泣の聲は行路に滿ちて、月を踰ゆるもなほ絶えなかつた。一世の先覺聖德太子がこゝに薨ぜられたのである。

太子は大思想家として、將又大政治家として、古今にその倫稀なる英俊であつた。今その經綸の跡を見るに、太子の生涯四十九年の間に心血を注がれた鴻業の、文字として今日に遺されてゐるものは十七條の憲法と三經の疏とである。その憲法には我が國家の經營に關する太子の理想が表はれて居る。その理想の由つて來る根本の思想を物語つてゐるものが三經の疏である。卽ち三經の疏は太子の根本の信

參考資料
聖德太子傳（大日本史の中）
日本大藏經

斑鳩の宮　推古天皇の九年、聖德太子の造營せられし宮殿。法隆寺の東院はその宮址なり。

聖德太子　用明天皇の皇子。蘇我馬子と謀りて佛法を興隆し、冠位・憲法を制定し、三經の疏を著す。推古天皇の二十九（一二八一）年薨ず。御年四十九。

十七條の憲法　推古天皇の十二（一二六四）年に制定す。

三經の疏　法華經・維摩經・勝鬘經の註釋。

念・思想を表はしたもので、國家・人類・禽獸などといふ區別を離れて、總べてのものを概括し統一したものである。これが國土の經營、政治の理想として表はれたのが十七條の憲法である。その第一條に、

一曰、以和爲貴、無忤爲宗。人皆有黨、亦少達者。是以或不順君父、乍違于隣里。然上和下睦、諧於論事、則事理自通。何事不成。

とある。卽ち仲好くしようといふのが、その主旨である。これは個人としても、家庭としても、國家としても、平和といふことが太子の理想であつたのに基づくことは言ふまでもない。第二條に曰く、

二曰、篤敬三寶。三寶者佛法僧也。則四生之終歸、萬國之極宗。何世何人非貴是法。人鮮允惡。能教從之。其不歸三寶、何以直枉。

四生　胎生・卵生・濕生・化生をいふ。卽ち一切の生物なり。

この「四生之終歸、萬國之極宗。」とは人類のすべてのものの根柢とする理想であり、信念であり、生命である。かくの如き何人にも無くてはならぬ永遠の生命を拉し來つたのがこの第二條である。

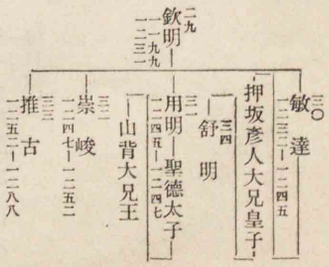
思ふに、この第二條を先づ首にあげて第一條とし、次に第三條の日本の國土の精華のことを記したものを第二條とし、その次に第一條の仲好くしようといふことがあるべきである。然るに太子はこの順序を變へて、眞先に仲好くしようぞと仰せられたのは、太子の身邊からしても、當時の世態からしても、已むに止まれぬ事情があつたのである。卽ち當時の太子には平和といふことが何よりも必要な條件であつたのである。

太子は御生誕以來僅に二十年程の間に、敏達・用明・崇峻の

第三條　「三曰、承詔必謹、君則天之、臣則地之。天覆地載、四時順行、萬氣得通。地欲覆天則致壞耳。是以君言臣承、上行下靡。故承詔必愼。不愼自敗」

三天皇の崩御に會ひ、その間一代毎に皇室に動亂があり、又蘇我・中臣兩氏の間には權柄の爭奪が影を潜めなかつた。この淺ましい世相の中に在つて、太子は孜々として怠らず、非常なる修養を積まれたのである。その間に太子が痛感せられたことの第一は、爭の忌むべきことであつた。

推古天皇の太子に立ち、攝政として、外交上では朝鮮問題を解決し、內治の革新には憲法を發布せられて、その第一條に平和といふことを仰せられたのは、蓋し所由する所淺からぬものがあつたのである。太子は平和の權化である。その生涯の御事蹟には、この平和主義が著しく光彩を放つてゐる。朝鮮との外交問題にしても、欽明・敏達の二先帝が御臨終に際し、無念の涙に暮れて御遺言せられた程の難題を、太子は十年程の間に御解決なされたのであつた。以來太子の御



治世中は、遂に一度も兩國の間に紛擾は起らなかつた。又國內には大逆非倫なる馬子が控へて居つたが、太子の攝政中約三十年の間は、事なく過ぎたのであつた。これは實に太子の平和主義が、遠くは外國に及び、近くは周圍の人々をも教化した爲であるといはねばならぬ。憲法第十條に、

十曰、絶忿棄瞋、不怒人違。人皆有心。心各有執。彼是則我非、我是則彼非。我必非聖、彼必非愚。共是凡夫耳。是非之理詎能可定。相共賢愚、如鐶无端。是以彼人雖瞋、還恐我失。我獨雖得、從衆同擧。

とあるは、第一條の裏である。「腹の中の怒も形に現した怒も、すべてこれを棄てて了つて、人が自分の意見に從はないとても腹を立てるな。人には皆各自の考があつて、自分がよいと思へばこそそれを行つて居るのである。他人の行をこち

馬子　蘇我馬子。敏達・用明・崇峻・推古の四朝に大臣たり。深く佛を信ず。物部守屋を殺し、又崇峻天皇を弑し奉る。推古天皇三十四（一二八六）年歿す。
稻目—馬子—蝦夷—入鹿

らでは悪いことと思ふこともあり、こちらで善い積りで行つてゐるのを他人は悪いと受取ることもある。自分が必ずしも聖人とは云はれない。他人が必ずしも愚とは決らない。自分も人も同じ人間である。是非曲直は人間の上にはなく、道の上にあるのである。人間は皆共に凡夫であれば是非を分ち定むるものは道である。人間である自分等が、賢愚の別なきことは、丁度それは鐶に端のないやうなものである。故に他人が腹を立てて我に對するとも、その相手になつて張合ふ代りに、先づ自分に誤はないかを顧慮せよ。自分一人では善いと思つても一了見で事をするな。天下の公衆の意見を取入れて然る後に事を行へ。といふのが、卽ちこの十條の主旨である。

この條には、普通の倫理道德の立場では解釋の出來ない

深みがある。特に「共是凡夫耳。是非之理詎能可定。」といふ思想が太子の實際生活に現れては、その妃に對して、常に「世間皆虛假、佛唯眞。」といふ言葉となつてゐる。何といふ根本的に眞理を道破した痛切な言であらう。又田村皇子に、「財產といふものは當てにならぬ。唯三寶だけは不滅のものであり、永遠の力である。」と仰せられ、御子達の頭を撫で手を牽いては、「諸惡莫作。衆善奉行。」と仰せられて三世諸佛の通願の偈を示された。

因果應報の道理を教へられたといふことである。

かくの如きは、太子の精神の根柢に確固たる信念が存することに基づくものである。太子以後に於て、不思議にもこの精神が日本佛教各宗の根本精神として現れ、日本文化を培うたのである。傳敎・法然・道元・親鸞・日蓮等はいづれもこの精神に立ち、一としてこの信念に基づかないものはなかつ

田村皇子　舒明天皇。

御子達　八男六女あり。長を山背大兄王といふ。次は財王・日置王・長谷王・三枝王・伊止志古王・麻呂古王・白髮部王なり。

偈　佛の功德を讃美する頌詩。

傳敎　名は最澄。比叡山延曆寺の開祖。弘仁十三(一四八二)年寂す。

た。太子は千三百餘年前に薨ぜられたが、斯樣な眞理に徹した信念を持ち、暖かな平和主義を懷いて、國民を慈しむことは慈母も及ばぬ程であらせられたその惠光は、當時の人々を照らしたばかりでなく、實に永遠に光り輝いてゐる。人生は短い。併し人格は永生である。（島地大等―「思想と信仰」による）

儒教の存するところ、今なほ孔子あらざるはなく、佛寺の建つところ、到るところに釋迦あり。耶蘇は十字架にかゝりきと雖も、今なほ基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激する者の胸には、楠公その人の生命あり。蒸氣機關の動くところにワットの血液あり。電氣の線のかゝるところは卽ちフランクリンが永生の地にあらずや。まことの永生は時と共に深きを加へ、人と共に廣きを加ふ。されば一人の精神は千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々汨々として遂に世界を動さずんば已まざるべし。（高山樗牛―「樗牛全集」）

法然　淨土宗の祖。建曆二（一八七二）年寂す。年八十。

道元　曹洞宗の祖。建長五（一九一三）年寂す。年五十四。

親鸞　一向宗の祖。弘長二（一九二二）年寂す。年九十。

島地大等　佛教學者。岩手縣の人。東京帝國大學講師。昭和二年歿す。年五十三。

高山樗牛　評論家。文學博士。名は林次郎。山形縣の人。東京帝國大學哲學科出身。明治三十五年歿す。年三十二。

一三　中道を歩む心

世界の文化史を繙いて、その純正と莊嚴とに胸を打たれたのは、蕞爾たる希臘半島に生活した古代希臘人の文化の偉大瑰麗であつたことである。史家は、「凡てのものに於て、中庸を得んことは希臘人の理想であつた。」といつた。この中庸の德こそは、彼等が生活の原則であつて、これを建築・文藝に表はし、更に運動競技・政治にも用ひたのである。

この中庸好みは、すべての誇張・極端・奇矯を嫌忌し、單純・調和・晴朗を愛好して完璧なるものを作り出すことがその理想であつた。されば希臘人は、羅馬人や支那人の如く、壯大なる伽藍を作りて人目を峙てんことを志さずして、小規模なる神殿の建築に、精神の一切を傾け、小さき花瓶に永遠の生

參考資料

金子馬治「希臘思潮」
波多野精一「西洋宗教史」
和辻哲郎「希臘天才の諸相」
田部重治「文藝復興」
凡てのものに於て云々　ヴアン・ルーン著「世界史」に出づ。

（ラオコオン作）

命を刻み込むことに專念したのである。彼等は、物に役せられば志を喪ふことを知り、專ら單純を求めた。故に單純は又希臘文化の著しい特色となつた。波斯・埃及・バビロンの影響の中に在つて、しかもそれ等を統一して簡素にし、その中に永遠不死の高貴を含めることがその理想であつた。

翻つて我が國民の古代生活を見るに、印度の煩瑣なる佛教も、支那に起つた儒教も、繪畫も建築も、大和島根に渡り來つては單純化せられたことの著しきに驚かざるを得ない。我が文藝が、如何に單純なる表現法の中に萬斛の熱情を盛らんとしたか、我が國民生活が、古來如何に簡素單純を以て一貫したかを見れば、その物心兩界に亙る單純好みこそは、眞に我等の誇るべき一大德操ではあるまいか。

諸外國を旅して祖國に歸るや、驚異と喜悅とを禁ずる能

はざるものは、我が國民が中庸を好む心の強烈なることである。平凡の中に深刻を藏し、目前の相に永遠を收めんとする我等の傳統的情操は、極端・誇張を惡德として排斥するのである。我が國民が三千年來、不思議なる國民生活を持續して來たことは、職としてこの中庸の德操と單純好みの性情とに由るのである。かくの如く我が國民と希臘人とが、人生觀照の根本的態度を單純好み中庸好みに基礎づけてゐることは、期せずして東西相應じたものといはねばならぬ。

我等は調和なきところに不幸を感ずる故に、自己一人の幸福のみを求めずして、社會全體の幸福を追求する。それは、社會と稱する全體の調和ある環境の中に於てのみ、個人は眞實の幸福を發見するからである。自己といふことを考へる前に、自己と家庭、自己と社會、自己と國家、自己と全宇宙と

の關係に於て自己を考へるのが、我が國民の慣習である。我は遠く海外の個人主義の熾烈なる國々に遊ぶ時、この中庸好み調和好みの美しさを意識して、故國に一入の懷かしみを覺ゆるのである。かくの如く平和を樂しむ我が國民には、その個人的思索に於ても、國家的活動に於ても、急激・極端・複雜・亂離・誇張・慘酷なることはあり得ない。若し然るものがあるとすれば、それは一時の變態か、乃至は一部分の人の迷妄である。この意味に於て、我が國民生活は、世界にその比を見ざる理想的生活であるといはねばならぬ。然るに、現在の我が社會生活を亂調・亂諧ならしめんとしつゝあるものがある。狹小なる領土には包容し切れないほど增加しつゝある人口の問題がある。更に精神的方面を觀察すれば、明治・大正を通じて入り來つた西洋文明の潮流が、餘りに急激であり、色彩が餘りに華麗であつたために、我が國民の思想がその平均を破られんとする現象がある。

かゝる物心の兩界に亙る動搖時代に於ては、人間は强烈なる色彩を愛し、喧噪なる音響を好み、極端なる思想を喜び、急激なる言動を壯なりとするのが常である。これを古に徵するに、希臘に於ては、ソクラテスの時代がそれであつた。彼は守舊思想に反對し、他方に過激奇矯を事とする詭辯思想に反對して、左右兩極の思想より烈しい挾擊を受け、終に毒杯を飲むの已む無きに至つたのである。しかし、當年に破れたソクラテスの中庸思想は、遂に永遠の勝利者となつた。支那に於ても、春秋戰國の世、諸子百家の說が橫行し、守舊と過激との兩極端の思想が盛行した時、百代の師表孔夫子が現れて、その穩健中庸の說を提唱したが、當代には容れられず

ソクラテス　希臘の哲學者。人倫道德を高唱して詭辯派に對せしが、紀元前三九九年刑に處せられ、毒杯を飲みて歿す。（前四六九—三九九年）Socrates.

孔夫子　支那の大聖。名は丘、字は仲尼。魯の人。魯の定公に仕へて治績あり。哀公十六（西紀四七九）年歿す。年七十三。

して終つた。しかも、その思想は思想的中核と爲つて永く後世を統率して居るのである。更に革命期の佛蘭西に於ては、ルイ十四世以來の專制政治が、細民の生活を甚しく壓迫したのに對して、急激斬新、人目を一新するが如きルソーの大音響が起つたのである。その時に、「ルソーの學說の勝利は、佛蘭西の國民的幸福を增進するものにあらず、却つて佛蘭西國民はこれが爲に永く窮乏の生活を續くべし」と叫んで、極力これに反對したのが、チユルゴー等の中庸漸進思想家であつた。惜しいかなチユルゴー等も亦左右兩極端の黨派に挾擊せられて、佛蘭西はルソーの思想を指導原理とする革命に突進して了つた。その結果はミルの言空しからずして、ナポレオンの帝國主義に逆轉するの止むなきに至つたのである。史を繙くものは、常にかゝる事例に逢着して、無限の

ルイ十四世　フランスの皇帝。內政・外交共に失敗に終り、國民塗炭の苦に陷れり。(一六三八—一七一五年) Louis XIV.

ルソー　フランスの思想家。スキスのゼネバに生まれ、フランスに入つて、主情的思想を主張し、その言說はフランス大革命の動因となれり。(一七一二—一七七八年) Rousseau.

チユルゴー　フランスの政治家。パリーに生まる。後大藏大臣に進む。(一七二七—一七八一年) Jurgot.

ミルの言　「過去を無視する新機軸は必ず反動政策に終る」ミルはイギリスの哲學者。(一七七三—一八三六年) Mill.

ナポレオン　フランスの皇帝。コルシカ島に生まる。征露の役に敗れて、遂にセントヘレナ島に流さる。(一七六九—一八二一年) Napoleon.

感慨に搏たれるのであるが、決して疑ふを要しない。斯くの如きは何人にも睹易き理法である。しかも易々たるが如くにして、最難事であるのはこの中道を歩むことである。中庸の德は、一見人情の常なるが如くにして、これを說くの難き、これを行ふの更に難き、到底想像の外であるからである。中道を歩むものは、常に犧牲者たるの覺悟を要し、中庸の德を實行せんとするものは、常に强固なる意志の力を具ふることを要するのである。

今や昭和の日本は、集中の時代を終つて、再び膨張の時代に轉回せんとして、明確なる目標、明白なる思想を吾等に要求してゐる。內、國民的生活の展開を計り、外、國際精神の新理想に基づく新世界の創造の爲に努力しなければならぬ。これこそ我等が當面の急務である。大空に色なく、中道に新奇

はない。たゞ人類多數の永遠なる福址は、常に純一にして中道を歩むを愧ぢざる者の眞摯なる努力の中より生まるゝものである。（鶴見祐輔―「中道を歩む心」による）

橄欖樹の繁つた小高い森の彼方に、ゼウスの神の彫像、オリムピヤの神々の尊い姿が見られる。神殿へ進む兩側には、綠の並木の間に樣々の純白な美しい彫像が立つてゐる。ギリシャ全土から集つた老若男女の群は、人波を打つてこの神殿へと進んで行く。白く長いガウンを着た少女の群は、月桂樹や橄欖樹の枝を手に高く捧げ、花輪に飾られた車を引きながら、神々を讃美し、生活の美を祝福する歌を謠ひ續けて、進んで行く。海濱の大遊戲場には、種々の競技や遊戲が行はれて、勝利を爭ふ喊聲は賑々しく聞える。森の彼方の靜かな場所には、全國から集つた抒情詩人や劇詩人の詩歌の競爭が行はれて、審判官や民衆はその朗讀される詩歌に耳を傾けてゐる。競技の勝利者を祝福する凱歌や、大宴會場の歡聲は、徹宵どよめき渡つて歡樂の盡きるのを知らない。（金子馬治―「歐洲思想大觀」による）

鶴見祐輔　評論家。岡山縣の人。明治十八年生まる。東京帝國大學政治科出身。

ゼウス　ギリシャの主神。Zeus.

オリンピヤ　ギリシャ神話中の十二の神。ゼウスと共にオリンプス山に住む。Ceynpian.

ガウン　寬衣。Gown.

金子馬治　評論家。明治三年、上田市に生まる。早稲田大學文學部出身。現に同大學教授。

一四　西の京

春雨は絲のやうに細く靜かに降つた。

私を案內すべくやがてやつて來た雛僧の番傘には、西の京藥師寺と大きく書いてある。それが既に私の旅の興をそつた。

見ると裳階を持つた藥師寺の三重塔は煙雨に包まれて立つてゐる。生駒の連峰には鼠色の雲がかゝつては晴れ、晴れてはかゝつた。顧みると千二百年前の古都の地は茫としてそこに横たはつてゐる。私は何とも言はれない氣がした。

「よく降る雨だね！」

藥師寺の塔

藥師寺　奈良縣生駒郡都跡村大字西の京にあり。法相宗の寺。奈良七大寺の一。本尊は藥師如來。天武天皇、皇后の御病氣平癒を祈らんために高市郡岡本に建立せられしを、元明天皇の時、今の地に移さる。後屢火災に罹り、今は三重塔の外は德川時代の建築に係る。

裳階　普通の屋根の下に小さき屋根を附けて廂の用をなすもの。

生駒の連峰　藥師寺の西方に當る。生駒山を中心とせる連峰。

「さうですね。」

「雨の日にも見物人はやつて來るかね？」

「え……」

こんな會話をしながら私達は歩いた。前には藥師寺の講堂金堂――世界無比のブロンズの佛像を有したその建物は、寂として降りしきる春雨の中に立つてゐた。

雛僧は携へて來た大きな鍵をぢやら〳〵音させながら、先づ講堂の扉の鍵穴の中に入れて、そしてくゞりを明けて、そのまゝ先に入つて行つた。

私も入つて行つた。と、古臭い塵埃の匂が一番先に私の鼻を打つた。それは千年以來の塵埃の匂である。あらゆるものをすべて塵に歸せしめて了つた塵埃の匂である。私は堪へられない心持がした。奈良の都の昔が私の魂に蘇つて來た

ブロンズ　青銅。唐金。Bronze.

やうな氣がした。

堂の中は薄暗かつた。扉の格子や長押（なげし）から光線は入つて來てゐるけれども、四面の扉がすつかり閉められてあるので、初は佛像の所在すらも辨ずることが出來なかつた。しかし段々眼は馴れて來た。私は其處に大きな三尊佛の靜坐してゐるのを認めた。

その時代にあつては、この佛像は諸人參拜の尊影となつて、天皇・皇后を始め、公卿・百官・庶民に至るまで、すべて皆この前に來て歸命頂禮した。堂も立派に、境内も賑やかに、香煙があたりに遍かつたに相違ない。しかし一盛一衰は世の常である。佛像は依然としてあり、佛法は依然として存してゐるけれども、時には香煙に包まれ、又時には暗い光線の中に端坐しなければならないのである。私は千年以來の古佛像が、

三尊佛　本尊藥師如來、脇侍日光・月光二菩薩をいふ。

かうして國寶になつて今此處に殘つてゐるといふことについて、種々と考へずにはゐられなかつた。

雛僧は型の如き案内を私にした。

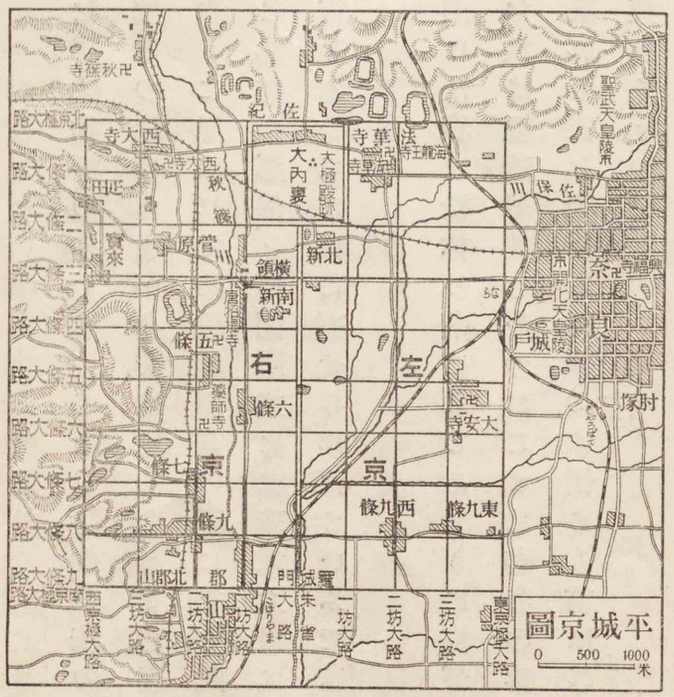
ブロンズの巨像は黑く水も滴るばかりに仰がれた。雨の日には殊にその色が濃やかに光つて見えるといふことなどを雛僧は話した。私の歩く靴の音は靜かに堂内に反響した。

金堂にもこれと同じ佛像が三體あつた。私はそれからそれへと雛僧のあとをついて歩いた。天女の飛翔する形を刻んだ水煙を纏つた三重塔の前では、私は蝙蝠傘を傾けて長い間立つて仰いだ。

奈良に遊んで西の京を訪はないものは、奈良に行つたものとは言はれない。實際其處にはその時分の跡が到る處に

殘つてゐる。田の中の小高い處に大極殿の柱石の跡の完全に殘つてゐるなどは、不思議に思はれる位である。

法華寺・海龍王寺・西大寺・秋篠寺、中でも唐招提寺は依然として千百餘年の木造建築をそのまゝ殘してゐる。道に面した門、瀟洒な松林綺麗に掃除された境内、その奥に鴟尾の高く四隅にあがつ



てゐる金堂があつた。右には昔の僧房がそのまゝになつて殘つてゐた。

榮華を盡くした時代、物語の多く殘つてゐる時代、佛法の盛んであつた時代、その時のさまが今でもはつきりと私の眼に映つてゐるやうに思はれた。華嚴經禮讃の下に築き起されたあの大きな毘盧舍那佛、その開眼式には、聖武天皇は皇后以下、公卿・百官を帥ひてこれに列せられたといふではないか。

唐招提寺の境内には、春は松林の中にところ〴〵に梅が白く雜つて咲いた。秋は紅葉が美しかつた。ことに初冬の落葉の疎々として亂れて徑を埋める時分には、何とも言はれないさびしい感興をさそつた。

さびしさの旅よ夕べよかくて世は千とせ百とせ束の間にして

私はかういふ歌を讀んだ。

法隆寺は國寶の府であるが、七堂伽藍の形も多く改められずに殘つてゐるので、廢都らしい感じは寧ろ西の京の方にしみ〴〵と味はふことが出來た。法隆寺はあまり開けすぎてゐた。又感じが新しかつた。聖德太子の夢殿のあるあたりはそれでも流石に古い感じが人に迫つて來るが、折角の錆は剝され、苔は取去られ、塵埃の匂は失はれ盡くしてゐるやうな氣がした。

西の京、實際廢都の趣の豐かなのは、日本では西の京だ。鎌倉も開けすぎ、京都もその意味ではやゝ新しすぎる。唯、奥州の平泉のみは小さくはあるが、西の京に似た感じを旅人に與へる。（田山花袋―「山水百記」）

平泉　岩手縣西磐井郡平泉村。鎭守府將軍藤原清衡・基衡・秀衡・泰衡の四世の古蹟。

田山花袋　文學者。名は錄彌。群馬縣の人。昭和五年歿す。年六十。

一五　平安城

歷史は國勢の變遷を記すものにして、變遷はまづ都會に兆すとせば、歷史の大部分は都會を舞臺として起れる事件を以て充たさるといふも過言に非ず。進歩の木鐸たるものも、地歩を都會に占めずんば、その抱負を施すに處なし。文運の發展もこゝに基礎を固めて、然る後、全國に弘布するなり。されば首府の勢力の强大に過ぎたること、平安朝の如きも多からず。平安朝の歷史、殊にその文藝の歷史は、全國の歷史に非ずして、たゞ京都の歷史なり。平安京裏の貴族は安逸に馴れ、懦弱に流れ、京都の中に跼蹐して、身心を活潑に使役するを欲せず。公事・供養にあたら日を費して、實務を執るを卑しみ、地方の施政の如きは毫も意に介せず。國郡睽離の形勢

參考資料
藤岡作太郎「國文學全史平安朝篇」
裏松光世「大內裡圖考證」
藤岡作太郎・平出鏗次郎「日本風俗史」

は年々に進み行けども、知らず顏に一時の安を帝都に貪りぬ。都鄙の關係かくの如く薄くして、しかも文學はたゞ都人の文學なり。地方を度外に置くことを欲せざるものも、わが平安朝文學の研究には勢しかせざるを得ず。

萬葉集の和歌を見よ。人麿は石見の邊地に哀絕の調を歌ひ、赤人は東、富士の名山、西、伊豫の溫泉を賦し、旅人は筑紫の名所に感吟少からず、家持は越中の山水と神靈相通ず。東歌、防人の詠、遠國微賤の民が嘯く所、また傾聽すべきものあり。平安朝にも、業平の東下り、貫之の京上り、實方の奧州ゆきなど異數のことあり。道眞が太宰府の貶謫、西行が諸國の行脚は殊に稀有の例なるが、首府孤立の時代にて、いづれも文壇一瞬の電光石火、大體の形勢には何等の影響をも與へず。諸國の交通をいへば、蓋し奈良朝よりも開けたることある

石見の邊地に云々　萬葉集卷二に、「從石見國別妻上來時歌」、「石見の海角の浦回を浦無しと人こそ見らめよしゑやし浦は無くともよしゑやし潟は無くとも鯨魚取り云々」とあり。

伊豫の溫泉云々　萬葉集卷三に、「天皇の神の命のしきます國のことゝく湯はしもさはにあれども島山のよろしき國とこゝしかも伊豫の高嶺のいさには云々」とあり。

筑紫の名所云々　萬葉集に

べし。延暦年間、坂上田村麿の東夷征伐ありて、東北の來往もこれより度數を加へたるならん。また同じ頃、諸所の關を廢して、公私往還の便を計り、足柄路が富士山の噴火によりて壅塞せられしを以て、新に箱根路を開けり。されど旅行はなほ不便に、草枕、萱の假廬に一夜を過す折もあり、盜賊の患も多ければ、貴族は誰か遠く出づるを望まん。たゞ平安數里の中をわれらの世界と甘んじて、たま〳〵の遊山・物詣は、石山または長谷の參籠、住吉の舟遊なり。平安末期に至りては、やや遠隔の地に出遊することも少からずなり、白河法皇等は熊野に、鳥羽法皇等は嚴島に御幸ありて、萎縮せる意氣のやや發展したる觀あり。されど概括していへば、光源氏が須磨の近流に望鄕の念に堪へず、涙痕の袖に絶えざりしもの、これ平安貴族の常情なりき。

は所々に見ゆ。卷六に「宿次田温泉聞鶴喧」歌」、「湯の原に鳴くあしたづは吾が如く妹に戀ふれや時わかず鳴く」

越中の山水を云々　萬葉集卷十七に越中の詠多し。ことに「二上山賦」は出色のものなり。曰く「射水川い行きめぐれる玉くしげ二上山は春花の咲ける盛りに云々」

東歌　古に東國の人々が、當時の東國の方言を以て詠出せる和歌。萬葉集に多く收錄す。一五〇頁下段參照。

防人の詠　邊要の地を警備せし兵士の詠ぜし和歌。萬葉集に多く收錄す。「けふよりはかへりみなくて大君のしこのみ楯といで立つ我は」の類。

業平の云々　卷八「伊勢物語」參照。

貫之の云々　卷八の三六頁「土佐日記」參照。

實方の云々　藤原實方は一

建國以來、歷代の帝王多くは代を改むる毎に宮城をも遷し給へり。されど時勢の進歩し都民の增加するに從ひて、漸く簡易なる遷都は實行し難きに至り、靑によし奈良の都は咲く花と匂ひて、こゝに七代七十餘年を經たり。桓武天皇は、住みなれし都城も不便少からねばにや、こゝにまた遷都の議は動きぬ。延暦三年、地を山背國乙訓郡長岡に相して、新都の造營を叡めしが、その地淀川に近く、舟楫の便ありとはいへ、面積狹隘にして萬年の帝都に適せず。更めて和氣淸麿の奏議により、葛野郡宇太の地を占す。延暦十三年、盛儀を具へて新營の都に遷幸あり。詔して宣く、「この國山河襟帶、自然に城を成す。この形勝によりて、山背國を改めて山城國となすべし。子來の民、謳歌の輩、異口同辭に號して平安京といふ。今これに從ふべし。」と。これより新都は平安京と稱せられて、

條天皇に仕へて左近衛中將たり。一日和歌のことによりて藤原行成と爭ひ、陸奥守に貶せられ、長德四（一六五八）年、任所に歿す。

道眞云々　卷八「菅原道眞」參照。

西行云々　卷八「長谷寺」參照。

坂上田村麿云々　桓武天皇の延暦二十（一四六一）年、征夷大將軍として蝦夷を征し、陸中膽澤城を築いて鎭處とせり。

足柄路云々　延暦年間に屢富士山の噴火あり。

石山　滋賀縣滋賀郡石山村に石山寺あり。

長谷　奈良縣磯城郡初瀨町に長谷寺あり。

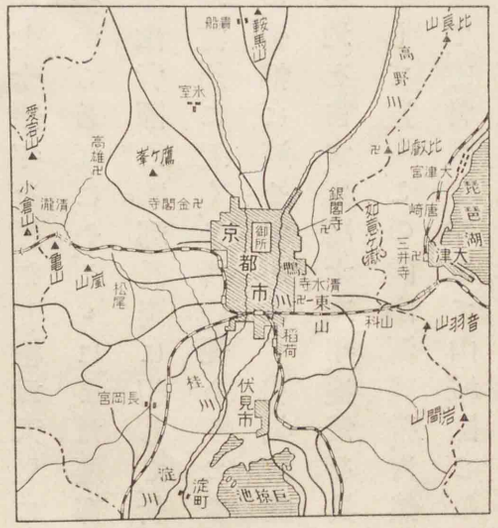
住吉　大阪市住吉區に住吉神社あり。その海は舟遊に適す。

熊野　和歌山縣に在り。西牟婁郡を口熊野、東牟婁郡を奥熊野といふ。熊野三山・那智の瀧などあり。

嚴島　廣島縣佐伯郡宮島に

千七十五年の間、天つ日嗣の常の御あらかとなりて、今もなほ皇室の大儀はこゝに行はるとぞいふなる。

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり。山川の風景行くところとして佳ならざるなきがなかに、殊に衆美を聚め、群を拔いて立てるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキスにしたるもの。規模の雄大、豪壯なるものは存せずと雖も、華麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡、如意が嶽より三の峯まで、東山三十六峯笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、氷室、鷹が峯、高雄の



嚴島神社あり。

七代　元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱德・光仁の七天皇の御代。

長岡　一三八頁地圖參照。

エキス　藥物又は食物の有効成分を抽出せるもの。Extractの略。

山々波濤の如く、西にやゝ隔りて愛宕・小倉・龜山・嵐山・松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の綠色濃きなかに、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日夕日に照りはゆる色の、千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、北の船岡、西の雙が岡は、大和の畝傍・香山・耳無の三山の如く、近く相竝びてあらねば、妻爭ひの口碑も傳はらねど、子の日の遊に小松曳く樂みなどいづれ劣らぬ處がらなり。南にやゝ隔りて男山これに對すれど、國家鎭護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐもかしこし。京の東端に沿うて、鴨河の流、紀の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に少しく離れて、桂河、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しくまた南に向かふ。二河南に合し、更に

四明が嶽　比叡山の絕頂をいふ。

比良　滋賀縣滋賀郡。

妻爭ひ云々　播磨風土記・萬葉集等にその傳說を記せり。

子の日の遊　正月の初子の日に小松を引きて千代を祝ふ。

男山云々　京都府綴喜郡にあり。男山には官幣大社石清水八幡宮あり。

淀の急流に流れ込みて沈々として西の方難波をさして走る。茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふる材料に乏しといへども、一面よりいへば、山の中に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配やゝ急なれば、蘆間に出で入る白帆の町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明かならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、曝す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸にうち上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫なご居る處は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしといへども、海なくして清き京都は益〻清かりしなり。

山紫水明の語はよく京都の景色をいひ表はせり。何處の

アルカリ性　金屬化合物にして、水溶液となりては赤色リトマス溶液を青色に變ずる作用をなす。

山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるなるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃やかなる京都の朝な夕ながいかに變化に富めるかは說明を須ひずとも明かなるべし。嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き浪俄に高く、黑雲奔りて魔の如く、見るが中に重なり重なりて海を覆ふ。波の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。波か雷か、世界はたゞ一暗黑の中に沒し去るかと疑はれて凄じかりき。かくの如く壯絕なる景は、わが數年の滯留中、遂に京都にては見ることを得ず。されど下京より吉田に通ひたる朝な〳〵の景色の、今にも恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひき渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の、一つ〳〵彼方へ彼方へと薄くなりて、向に寢たる東山は有

下京より云々　作者は第三高等學校教授たりき。

寢たる東山　蒲團著てねたる姿や東山（嵐雪）

るか無きかの夢より未だ覺めやらず、吉田の岡に竝び立てる松は墨繪の刷毛の濃く薄く、花賣る少女の姿は隱れて聲ぞまづ朝靄を漏れ來る。時雨の景色の又よその國には見られぬ樣よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふ中にはら〳〵と面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝるやさしき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

溫帶の地といへども、大陸の內部は、寒氣凛々たる冬期は直ちに烈日赫々たる夏期となり、氣候激變してその間に和煦の時季を見ず。海岸は、溫暖なるところ多きかはりには、年中春の如く秋の如くにて、夏冬の峻酷なる風物を感ぜず。四季交代の順序の明かなることわが國の如きは少く、わが國

にても、花も紅葉もなき浦曲などは、到底、京都の四季のながめの面白きに及かず。春立つと思ふばかりに、四方の山々霞こめ、空の色、水の色さへ昨日に變りておぼゆ。若菜つみ、小松曳くも新しき年のしるしなり。梅の花散りて、鶯老を啼けば、柳の綠、桃の紅、花の音信あわたゞしく、夢かとばかり青葉となりぬ。垣の卯の花、花橘を過ぎがてにする郭公の、暫くして聲もせずなりぬるは、時知りぬるとわけてめでたし。五月雨に軒の玉水ひまなく、公事・物詣も途絕えがちなるに、晴るればやがて暑さの凌ぎがたき、それも一時、名越の祓に夏も終りぬ。冷風立ちて一葉の落つるに秋を知り、野邊の千種、蟲の聲々、月影さへもくまなくて、とりぐ〳〵なる物のあはれはこの頃ぞまされる。千入に染むる紅葉を秋の名殘として、木枯騷がしく、淋しき冬の霜に痛み、雪に慰みて、早くも年は暮れ

名越の祓　陰曆六月晦日に各神社に行ふ神事。夏祓・六月祓などともいふ。

ゆきぬ。

愛すべき山川の懷に涵養せられたるわが國民は、永く薫育の恩を忘れずして自然を思ふこと深く、わけて四季の景物の變遷に注意せしこと、平安朝の如く著しきはあらざるべし。代々の撰集の部を分つや、四季は最も重んぜられたり。花や月や、その折々毎に合奏・歌合は絶えず。この時代より盛んなりし五節句も、起源は多く支那にあるべしといへども、よく國風に融化し、又よく季節に調和したる遊樂なり。白馬(あをうま)の節(せち)は勇ましく神々しく、曲水の宴の上巳の節となりたるも優しく、端午は第一に盛んにして、淀野にひきし菖蒲の根を競ひ、軒に蓬を葺けば、藥玉の簾にかゝりたるも興あり。七夕の空澄みわたる頃、銀河を隔つる二星を仰ぎては、人間ならぬ世にも涙をそゝぎ、重陽には菊花の秋に驕れるを愛し

歌合　歌人集りて、左右に分れ、その詠歌を合はせて、判者に優劣の沙汰を乞ひ、勝負を爭ふ會。

五節句　正月七日の人日、三月三日の上巳、五月五日の端午、七月七日の七夕、九月九日の重陽。

白馬の節會　陰曆正月七日に、左右の馬寮より二十一匹の白馬を庭中に牽き、天皇を始め庶人も之を見る。邪氣におそはるるをさくるなり。

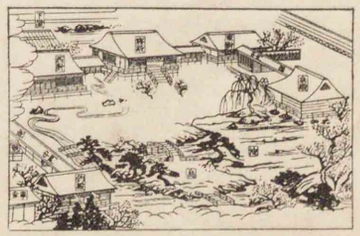
上巳の節　初は陰曆三月の初の巳の日なりしが、中世以後は三月三日となり、女子の祝日として雛祭を行ふ。

藥玉

て、吟誦夜を覺えず。近世に至りて算盤彈く丁稚、剃刀片手の下剃までが、「梅咲くや。」「初雪や。」など首をひねるは、自然を愛する國民固有の本性の然らしめたるなりとはいへ、又一は千年以前の祖先が深く四季折々の景色に惝恍せし結果なりといはざるべからず。

社會の進歩するに從うて、人工を以て自然に反抗する力は增加す。これやがて文化の恩澤なり。今日、開明の民は煉瓦の家屋風もすかさず、室内の煖爐春長しへなれば、何處にか北風のすさぶを知らん。夏は山地綠蔭深き處、海岸風涼しき處に暑さを避く。都會の住處軒たち續きては、月の盈ち虧け、星影の動くも氣づかず。平安朝の京都は未だかくの如く人口稠密ならず、文化進歩せず。從うてその住民も人爲の力を以て自然を左右せんとするほどの慾望を有せずして、却つ

て山川の美に憧憬せる本性は、あくまでこれに同化せんと試み、服飾の色彩、第宅・庭園の配置、一に模範を自然に取る。平安人士の行動の、いかに麗しく平安京の山紫水明と融和して、天人相映發せるかを見よ。人力を能ふ限り活動せしめ、鬼神を役して自然を己が用に供せしむるは、彼等の事にあらず。自然は人間に近づかずして、人間は自然に近づけり。彼等は科學を知らず、人力の偉大なるを知らず、たゞ自然に屈從せり。屈從せるにあらず、愛著せるなり。その愛著せるや、勞働に餘念なき蟻の如くならずして、青天の下に吟哦する雲雀の如し。月卿雲客は生活の苦痛を知らず。運輸の便に乏しき京都の地勢にも不足を感ぜず、たゞ景色の美に憧れて、烏兎匆々四百年、政事の實力はいつしか出でて關東に去りぬ。京都は實務の地にあらずして、風流の地なり。平安朝は實務の



第宅・庭園

時にあらずして、風流の時なりき。（藤岡作太郎―「國文學全史」）

ひととせ入道殿の大堰に逍遙せさせ給ひしに、作文の船、管絃の船、和歌の船と分たせ給ひて、その道にたへたる人々を乘せさせ給ひしに、公任の大納言殿のまゐり給へるを、入道殿、「かの大納言いづれの船にか乘らるべき。」と宣はすれば、「和歌の船に乘り侍らむ。」と宣ひて、その船に乘りてよみ給へるぞかし。

小倉山あらしの風のさむければ紅葉のにしききぬ人ぞなき

申しうけ給へるかひありて遊ばしたりな。御自らも宣ふなるは、「作文の船にぞ乘るべかりける。さてかばかりの詩を作りたらましかば、名のあがらむこともまさりなまし。口惜しかりける業かな。さても殿の『いづれにとか思ふ。』と宣はせしなむ、われながら心おごりせられし。」とぞ宣ふなる。一事のすぐるゝだにあるに、ましてかくいづれの道にもぬけ出で給ひけむは、古もあらぬ事なり。（「大鏡」による）

藤岡作太郎　國文學者。文學博士。金澤の人。東京帝國大學助教授。明治四十三年歿す。年四十一。

入道殿　藤原道長。

公任　藤原氏。關白頼忠の子。長久二（一七〇一）年歿す。年七十六。

小倉山　京都府葛野郡嵯峨村。

大鏡　卷八「世繼の物語」參照。

一六　二つの典型

平安朝時代の歌風を完成したのは延喜の頃で、古今和歌集を以て代表せらるべき貫之・躬恒・友則・忠岑等の活躍した時代である。その歌風は舊套を脱し、新旗幟を樹立したもので、技巧と情緒とを巧みに結合した敍情詩である。こゝに形式も思想の範圍も大抵一定して、以後はこの外に出るものはなかつたのである。

その後、寛弘の頃に至つて漸く新傾向が起り、從來の敍情詩的傾向に敍景的趣味を加へ、更に又排技巧の傾向を生じたが、なほ前期の權威は盛んなもので、容易にその範疇を脱することが出來なかつた。とはいへ新進の氣は到底制せられるものではなく、漸次に古典的から現代的に移らうとして、こゝに一種の新派を生じた。金葉和歌集を撰んだ俊頼がその中心である。この新派は舊套中にありながら、俗語をも用ひて一種の新味を加へたものであるが、古典的な反對黨は基俊を代表としてこれに抗爭した。この間に又折衷派とも云ふべき顯輔の一派も生まれて、歌界は餘程複雜になつた。併し要するに延喜を理想とするものと現代を主とするものとの爭であつた。亂が極まれば英雄が出る。時代は遂に俊成を生んだ。俊成は基俊に學び、然も俊頼を慕ひ、又顯輔の傾向をも考へたのである。俊成の撰進した千載和歌集はこの三派併合の結果に成つた所の典雅があり、清新があり、殊に洗煉せられた趣味の多い語句に富んでゐた。

この傾向は定家が覇を唱へた鎌倉時代の初期に於て、技巧的な含蓄の深い歌となつて現れるに至つた。これを撰集

參考資料

古今和歌集　二十卷。醍醐天皇の延喜五年四月十八日、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑等勅を奉じて撰す。歌を春・夏・秋・冬・賀・離別・羈旅・物名・戀・雜・哀傷・雜體（長歌・旋頭歌・誹諧歌）・大歌所御歌の部門に分類列載せり。別に貫之の和文の序、紀淑望の漢文の序あり。參考書には、僧　顯昭「古今和歌集顯昭註」
釋　契沖「古今餘材抄」
賀茂眞淵「古今集打聽」
同　「古今和歌集講義」
本居宣長「古今集遠鏡」
香川景樹「古今和歌集正義」
金子元臣「古今和歌集評釋」
新古今和歌集　一五一頁參照。
延喜　醍醐天皇の御宇（一五六一年―一五八二年）
貫之　紀貫之。望行の子。御書所預大内記・土佐守・玄蕃頭・木工權頭に歷任し、天慶九（一六〇六）年歿す。年六十五。
「人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香に匂ひける」
躬恒　凡河内躬恒。諶利の子。延喜十一年、淡路權掾に任ぜらる。
「心あてにをらばやをらむ初霜のおきまどはせる白菊の花」
友則　紀友則。八六頁參照。
忠岑　壬生忠岑。安綱の子。藤原定國の隋身。攝津大目となる。
「久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればやてりまさるらむ」
寛弘　一條天皇の御宇（一六六四―一六七一年）當時の歌人は清原元輔・大中臣能宣・曾根好忠・藤原公任等なり。
金葉和歌集　十卷。天治元（一七八四）年、源俊頼が

したのが新古今和歌集である。政權は既に武士に歸したとはいへ、それが爲に堂上は閑暇であつたので、公卿を中心とした歌道は愈〻その粹を發揮し、こゝに新古今和歌集は古今を綜合し千載に光被するの意氣を以て撰ばれ、大いに歌道の發達を極めたのみならず、多大の影響を後世にまで及ぼしたのである。從來歌人に經典と崇められてゐた古今和歌集に新の字を冠せしめたのは、その撰者等の意氣を窺ふに足るではないか。

平安朝時代ほど季節の變化を歌の題材とした時は無い。これは畢竟當時の歌人である公卿たちの生活に原因するのである。これらの歌人は殆ど都以外に足を踏出すことがなく、宮仕と遊樂と物詣とのみに日を過し月を送つて居たのであるから、季節とそれに伴なふ變化とが大事件となつ

白河法皇の院宣を受けて撰進したるものにて、六百七十首の歌を春・夏・秋・冬・賀・別・戀・雜・連歌に分類列載せり。

俊頼　源俊頼。經信の子。堀河・鳥羽・崇德の三朝に仕へ、左近衛少將兼木工權頭・左京大夫たり。歌學上の著に無名抄・俊頼口傳等あり。

「風ふけば蓮の浮葉に水こえて涼しくなりぬひぐらしの聲」

基俊　藤原基俊。俊家の子。官は左衛門佐に至る。歌學上の著に悅目抄あり。

「夏の夜の月待つほどの手すさびに岩もる清水いく結びしつ」

顯輔　藤原顯輔。顯季の子。皇后宮亮に至る。崇德上皇の詔を奉じて詞花和歌集を撰す。

「秋風にたなびく雲のたえまよりもれ出づる月の影のさやけさ」

俊成　藤原俊成。俊忠の子。皇太后大夫に至る。後白

て目に映つたのである。その季節に應じて咲き、散り、啼き、歌ふ花木・禽鳥が、また驚喜と悲嘆との好材料であつた。春の詩材としては鶯・梅・櫻を主とし、若菜・霞・柳・藤・山吹などの優美纖麗なものが選ばれた。秋には風の音、蟲の聲、月の色、露の光、星・女郎花・紅葉・菊などの哀感を寄せるのに都合のよい纖細巧麗なものが主となつた。鐵を溶かさんばかりの暑さ、篠を束ぬる夕立などは、當時の人の詩材とするには餘りに峻烈であつた。冬は引籠りの時で、見るものの少い時節である。杜宇と雪とが夏と冬とに於て詩人の感興を惹いた殆ど全部であつたのである。

勿論季節に拘らぬものもあるが、概して前代にあつた所の材料の中で纖細なもののみを取り、殊に美しい麗しい方面を取つて詠じたのであるから、題材の範圍は非常に縮小

河天皇の勅を奉じて千載和歌集を撰す。元久元（一八六四）年歿す。年九十一。

「昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山時鳥」

千載和歌集　二十卷。文治三年九月、藤原俊成の撰進したるもの。一千二百八十四首を春・夏・秋・冬・離別・羈旅・哀傷・賀・戀・雜・釋教・神祇に分類列載せり。

定家　藤原定家。俊成の子。新古今和歌集・新勅撰和歌集の撰者。仁治二（一九〇一）年歿す。年八十。

「大宮は梅のにほひに霞みつゝ曇りもはてぬ春の夜の月」

新古今和歌集　二十卷。建仁元年十一月三日、後鳥羽上皇の詔を承けて、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經・寂蓮法師等が撰進せるものにて、短歌千九百八十八首を分類列載せり。卷八、「蘆の若葉」參照。

し、貧弱とならざるを得なかつたが、この題材の範圍はその後永く斯道に嚴守せられたのであつた。併しその一つ〳〵の觀察に於ては、隨分微に入り細を穿つてゐた。

同じ道を何處までも進む。これに倦怠せぬ人は無いであらう。必ず何か違つたものを求めて止まない。平安朝末期には既に自然の美の眞解と、漢詩の影響と、單調を厭ふ心と、繪畫の影響とが錯綜交雜して多くの客觀詩を出すに至つたのである。自然の美を認めてそれに深く思ひ入る。こゝに感ずるものは自分の身の幸不幸ではない、窮通ではない。奥の分らぬ味ひである。如何に名づくべきか、はた如何にして極むべきか、自分には分らない。たゞ語の幽趣微韻によつてのみその幾分かを表はし得るのである。その情態を直寫してこゝに客觀詩は生じ、それに對する感想を披瀝してこゝに

主觀詩は生じたのである。

鎌倉時代の繪畫は平安朝時代のそれに比して、單に山川草木を寫すのみではなく、その中に含まれてゐるものを寫す所にまで進んでゐた。これに對しこれに接して居れば、その得る所のものは決して淺薄な感想ではない。必ず深い何ものかがある。當時の繪はその形體傳彩から客觀詩を起したと共に、幽遠の趣致をも起したのである。

更にこれらの他に當時の人心に深く浸染したものは、榮枯盛衰が眼前に車輪の如く迅速に廻轉したことである。盛者必衰諸行無常が事實として現示せられた當時は、また別種の感觸を起さざるを得ない。幾種の新宗教が唱道せられ、多くの渇仰者が忽ちに出來たことは、當時の人々が宗教希求の念の如何に熱烈であつたかを説明してゐる。その心を

鎌倉時代の繪畫　倭繪にその特色を見る。ことに宅磨・土佐・住吉の諸派盛んにして宅磨爲久・土佐光長・姉小路長隆・高階隆兼・住吉慶恩・藤原信實等著名なり。

新宗教　淨土宗（法然上人）・淨土眞宗（親鸞上人）・法華宗（日蓮上人）・時宗（一遍上人）・臨濟宗（榮西）・曹洞宗（道元）。

1. 古今集
2. 後撰集
3. 拾遺集
4. 後拾遺集
5. 金葉集
6. 詞花集
7. 千載集
8. 新古今集

1. 親ぶる心（まこと）
2. 物のあはれ
3. 幽玄（神秘）
4. 寂

心とした當時の歌は、たゞ表面だけ宗教者めかして、無常らしいことを云ひ、悟了したらしいことを云ふ歌とは自ら選を異にせねばならぬ。その全體を通じて、深い味ひ、美しい中に暗い趣の見えるのは自然である。乃ち幽玄の趣致は又この佛教の弘通よりも現れたのである。

而してこの幽玄の趣致は源を人の思想と感情との深遠な處に發するのであるから、その深遠の程度が進むと共に、普通の辭句では發表し得ないこととなる。乃ち從來の發表の仕方では靴を隔てて痒きを搔くが如く、到底十分に述べ盡くすことが出來なくなるのである。こゝに於て從來の制約を破り、更に新しい表現法を用ひて、極めて大膽に自己の思想感情を發表するものが現れた。此等の歌人の態度こそ實に敬服すべきものである。

六歌仙　在原業平・僧正遍昭・喜撰法師・大伴黒主・文屋康秀・小野小町をいふ。

「千早振る神代もきかず龍田川から紅に水くゝるとは」（業平）

「はちす葉の濁にしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」（遍昭）

「わが庵は都のたつみしかぞ住む世をうぢ山と人はいふなり」（喜撰）

「春雨のふるは涙か櫻花ちるををしまぬ人しなければ」（黒主）

「春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき」（康秀）

「花の色はうつりにけり

平安朝時代に新旗幟を樹立した功に於て、典型を千載に殘した功に於て、吾人は古今和歌集を尊び、その撰者や六歌仙を始め當時の歌人等を重んずる。それと共に又紛亂の後を受けてこれを平定し、更に典型を作り、歌をして至上の發達をなさしめた意氣に於て、新古今和歌集を崇め、その撰者を始め當時の歌人を尊敬して止まないのである。

（尾上柴舟―「古今と新古今」による）

わたの原やそ島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよあまの釣舟（小野篁）

秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞ驚かれぬる（藤原敏行）

月見れば千々に物こそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど（大江千里）

な徒にわが身世にふるながめせしまに」（小町）

新古今和歌集撰進當時の人人　その撰者等の他に後鳥羽上皇を始め奉り、藤原良經・藤原秀能・僧慈圓・式子内親王・宮内卿等著名なり。卷八「蘆の若葉」參照。

尾上柴舟　名は八郎。文學博士。岡山縣の人。東京女子高等師範學校教授。

古今集傾向の人々

小澤蘆庵　冷泉爲村に學び「たゞごと歌」を主張せり。享和元（一八〇一）年歿。年七十九。

「夕されば南の風に雲消えて見る目すゞしき沖のいさり火」

上田秋成　國學に通ず。文化六（一八〇九）年歿。年七十六。

「音たつる時雨もしらで稲こぎの夜聲にぎはふ冬の山里」

香川景樹　鳥取の人。香川景柄の養子となる。天保一四（一八四三）年歿。

みやこをば霞とともにたちしかど秋かぜぞ吹くしら河のせき（能因法師）

見渡せばやなぎさくらをこきまぜてみやこぞ春の錦なりける（素性法師）

水のおもにてる月なみを數ふれば今宵ぞ秋のもなかなりける（源順）

ひとの親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな（藤原兼輔）

御垣守衞士の焚く火の夜はもえて晝は消えつゝ物をこそ思へ（大中臣能宣）

いにしへの奈良のみやこの八重櫻けふ九重ににほひぬるかな（伊勢大輔）

夕されば門田の稻葉おとづれてあしのまろ屋にあき風ぞふく（源經信）

昨日こそ早苗とりしかいつのまに稻葉そよぎて秋かぜの吹く（讀人知らず）

年七十六。

「行く水の末はさやかにあらはれて河かみくらき月のかげかな」

木下幸文　備中の人。文政四（一八二一）年歿す。年四十三。

「かにかくに疎くぞ人のなりにける貧しきばかり悲しきはなし」

熊谷直好　大阪に住す。文久二（一八六二）年歿す。年八十一。

「はるゞゝと蓮の立葉ぞさわぐなる風わたるらし巨椋の池」

八田知紀　鹿兒島の人。明治六年歿す。年七十五。

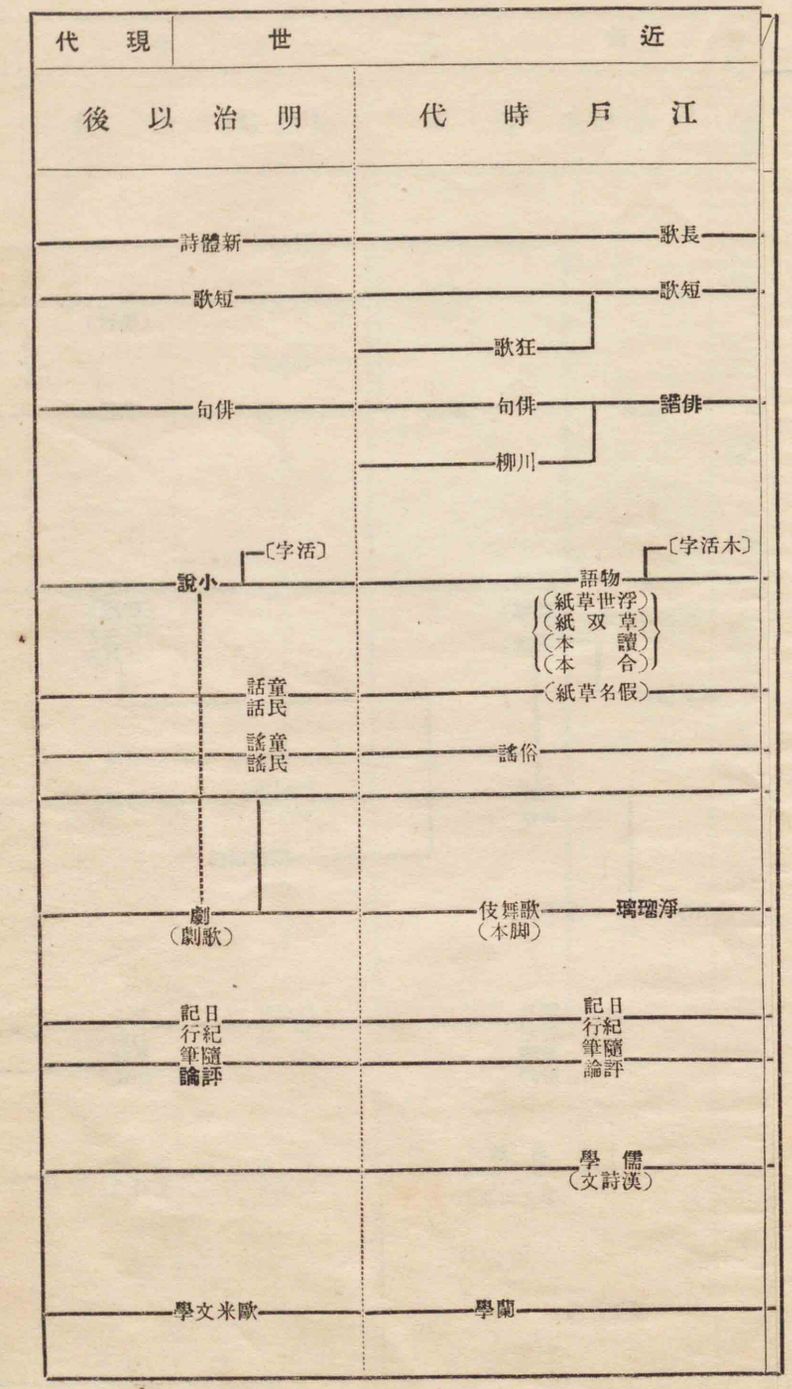
「蚊遣火の煙の上に咲きにけりしづが垣根の夕顏の花」

高崎正風　鹿兒島の人。宮內省御歌所掛長。明治四十五年歿す。年七十七。

「うち笑みて膝にはひよるかなしさはわが子人の子かはらざりけり」

新古今集傾向の人々　卷八、一五一頁參照。

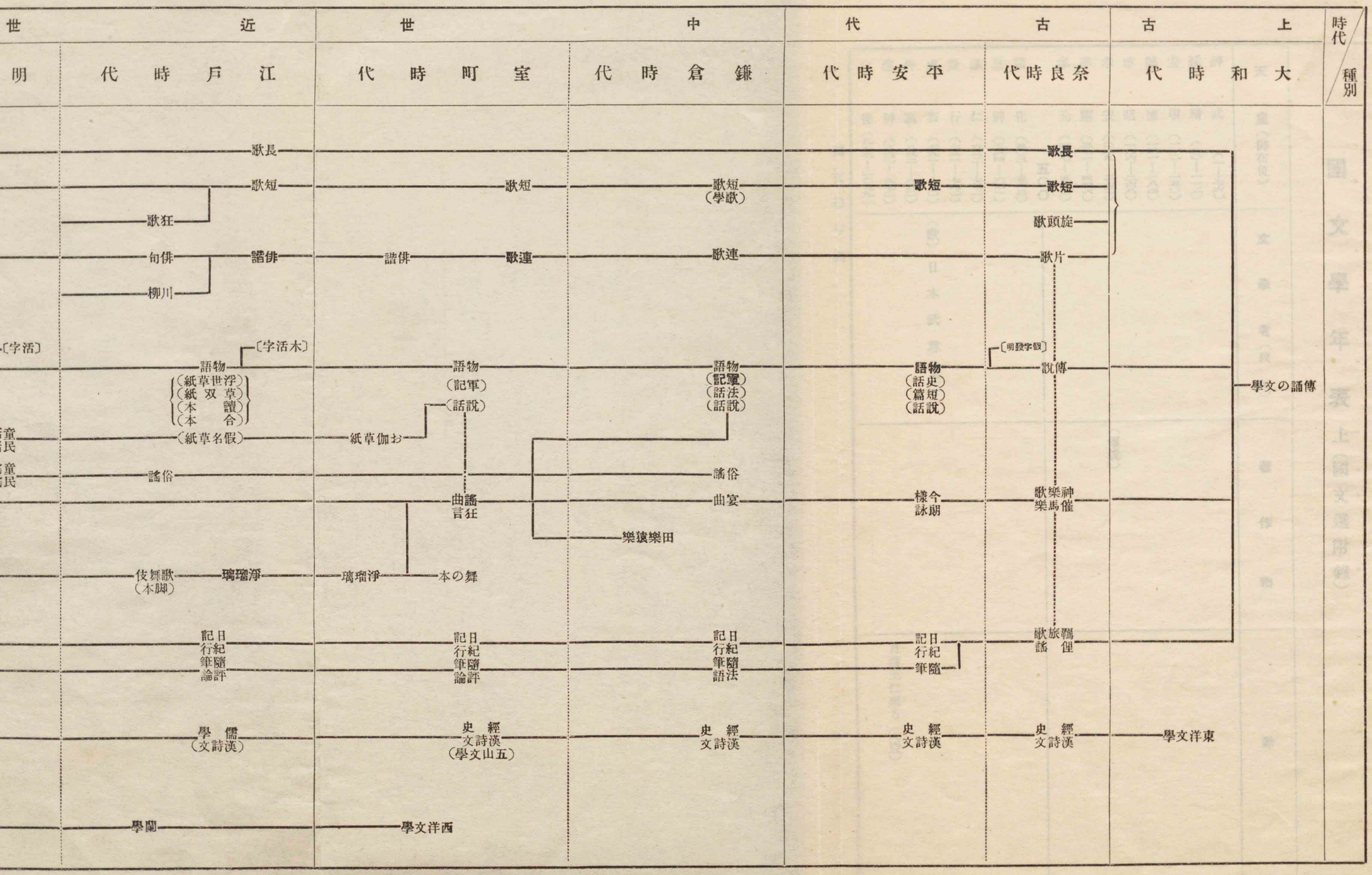
國文學形態史圖表（國文選附錄）



國文學形態史圖表（國文選附錄）

夕されば門田の稲葉おとづれてあしのまろ屋にあき風ぞふく（源經信）

昨日こそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋かぜの吹く（讀人知らず）



内省御歌所掛長。明治四十五年歿す。年七十七。「うち笑みて膝にはひよるかなしさはわが子人の子かはらざりけり」

新古今集傾向の人々 卷八、一五一頁參照。

現代	近世		中世		古代		古代
明治以後	江戸時代		室町時代	鎌倉時代	平安時代	奈良時代	
詩體新	歌長					歌長	
歌短	歌短	歌狂	歌短	歌短（學歌）	歌短	歌短	
						歌頭旋	
句俳	句俳	柳川	諧俳	歌連		歌片	
	諧俳		歌連				
說小〔字活〕	語物〔字活木〕		語物	語物（記軍）（話法）（話說）	語物（話史）（篇短）（話說）	說傳〔明發字假〕	
	（紙草世浮）（紙双草）（本讀）（本合）		（記軍）（話說）				
話童民話	（紙草名假）		紙草伽お				
謠童民謠	謠俗			謠俗			
			曲謠言狂	曲宴	今樣詠朗	神樂催馬樂	
				樂猿樂田			
劇（劇歌）	伎舞歌（本脚）	璃瑠淨	璃瑠淨	舞の本			
記行筆隨日紀	記行筆隨日紀		記行筆隨日紀	記行筆隨日紀	記行筆隨日紀	歌謠旅行	
論評	論評		論評	語法	筆隨		
	學儒（文詩漢）		史經（文詩漢）（學文山五）	史經（文詩漢）	史經（文詩漢）	史經（文詩漢）	學文
學文米歐	學蘭		學文洋西				

國文學年表 上（國文選附錄）

天皇（御在位）	文學者（歿年）	著作物	雜
神武（一—七六）			
綏靖（八〇—一二二）			
安寧（一二三—一五〇）			
懿德（一五一—一八四）			
孝昭（一八六—二六八）			
孝安（二六九—三七〇）			
孝靈（三七一—四四八）			
孝元（四四九—五〇三）			
五〇〇			
開化（五〇三—五六三）		（傳說）	
崇神（五六四—六三一）			
垂仁（六三二—七三〇）			
景行（七三一—七九〇）			
成務（七九一—八五〇）	（歌）日本武尊（七七一）		
仲哀（八五一—八六〇）			
應神（八六〇—九七〇）			
仁德（九七三—一〇五九）			百濟王仁來る（九四五）

一〇〇〇			
履中（一〇〇六—一〇〇五）			
反正（一〇〇六—一〇〇〇）			
允恭（一〇〇七—一一一三）			
安康（一一一三—一一一六）			
雄略（一一一六—一一三九）			
清寧（一一三九—一一四四）			
顯宗（一一四五—一一四七）			
仁賢（一一四八—一一五八）			
武烈（一一五八—一一六六）			
繼體（一一六七—一一九一）			
安閑（一一九一—一一九五）			
宣化（一一九五—一一九九）			
欽明（一一九九—一二三一）			
敏達（一二三二—一二四五）			
用明（一二四五—一二四七）			
崇峻（一二四七—一二五二）			
推古（一二五二—一二八八）			
舒明（一二八九—一三〇一）			
皇極（一三〇一—一三〇五）			
孝德（一三〇五—一三一四）			
大化 白雉			
齊明（一三一五—一三二一）			
天智（一三二二—一三三一）			

（歌謠）			始めて史官を置く（一〇〇五）
（祝詞）			
（壽詞）			
（宣命）			百濟佛像・經論を獻ず（一三三）
			十七箇條憲法成る（一二六四） 始めて留學生を隋に遣す（一二六七） 厩戸王子薨ず（一二八二）
			大化新政成る（一三〇五）
			八省百官を置く（一三〇九）

弘文（一三三一—一三三三）	（詩）	弘文天皇（一三三三）	
天武（一三三二—一三四六）	（歌） （詩）	鏡女王（一三四四） 大津皇子（一三四六）	
朱鳥			
一三五〇			
持統（一三四六—一三五七）	（歌）	柿本人麿（？）	
文武（一三五七—一三六七）			
大寶 慶雲			
元明（一三六七—一三七五）			
和銅			
元正（一三七五—一三八四）	（學）	太安麿（一三八三）	
靈龜 養老			
聖武（一三八四—一四一九）	（歌） （歌） （歌） （學）	山部赤人（？） 大伴旅人（一三九一） 山上憶良（一三九三） 舍人親王（一三九五）	古事記（一三七三） 日本書紀（一三八〇） 出雲風土記（一三九三）
神龜 天平			
一四〇〇			
孝謙（一四〇九—一四一八）	（歌）	橘諸兄（一四一七）	萬葉集 懷風藻（一四一一）
天平感寶 天平勝寶 天平寶字			
淳仁（一四一八—一四二四）			
稱德（一四二四—一四三〇）			
天平神護 神護景雲			
光仁（一四三〇—一四四一）	（學）	吉備眞備（一四三五）	歌經標式（一四三三）
寶龜			
桓武（一四四一—一四六六）	（學） （歌）	淡海三船（一四四五） 大伴家持（一四四五）	
天應 延曆			
一四五〇			

			律令を撰ぶ（一三六〇） 都を奈良に奠む（一三七〇）
			諸國に風土記を作らしむ（一三七三）

平城(一四六六—一四六九)				
大同				
嵯峨(一四六九—一四八三)				
弘仁				
淳和(一四八三—一四九三)	(學)	良岑安世(一四九〇)		
天長				
仁明(一四九三—一五一〇)	(學)	弘法大師(一四九五)		
承和				
嘉祥				
一五〇〇				
文德(一五一〇—一五一八)	(學)	菅原清公(一五〇二)		
仁壽	(學)	小野篁(一五一二)		
天安				
齊衡				
清和(一五一八—一五三六)				
貞觀				
陽成(一五三六—一五四四)	(學)	都良香(一五三九)		
元慶	(歌)	在原業平(一五四〇)		
光孝(一五四四—一五四七)	(歌)	小野小町(？)		
仁和				
宇多(一五四七—一五五七)				
寛平				
一五五〇				
醍醐(一五五七—一五九〇)	(歌)	僧正遍昭(一五五〇)		
	(歌)	在原行平(一五五三)		
昌泰	(學)	菅原道眞(一五六三)		
延喜	(歌)	紀友則(一五六五)		
延長	(歌)	凡河内躬恒(一五六七)		
	(學)	紀長谷雄(一五七二)		
朱雀(一五九〇—一六〇六)	(歌)	伊勢(一五九九)		
	(歌)	坂上是則(一五九〇)		

續日本紀(一四五七)				
古語拾遺(一四六八)				
文華秀麗集(一四七八)				
經國集(一四八七)				
				都を平安に遷す(一四五四)
				弘法大師高野山を開く(一四七四)
				勸學院立てらる(一四八一)
續日本後紀(一五三九)				
文德實錄(一五三九)				
竹取物語				
伊勢物語				遣唐使を廢す(一五四五)
新撰字鏡				
古今和歌集(一五六五)				
延喜式(一五八七)				

承平 天慶				
一六〇〇				
村上(一六〇六—一六二七)	(歌)	紀貫之(一六〇六)		
天曆				
天德				
應和				
康保				
冷泉(一六二七—一六二九)	(歌)	壬生忠岑(一六二五)		
安和				
圓融(一六二九—一六四四)	(歌)	源順(一六四三)		
天祿				
天延				
貞元				
天元				
永觀				
花山(一六四四—一六四六)				
寛和				
一條(一六四六—一六七一)	(歌)	清原元輔(一六五〇)		
永祚	(歌)	大中臣能宣(一六五一)		
正曆	(歌)	曾根好忠(？)		
長德				
寛弘				
一六五〇				
三條(一六七一—一六七六)	(學)	大江匡衡(一六七二)		
長和				
後一條(一六七六—一六九六)	(文)	清少納言(？)		
寛仁				
治安				
萬壽				
長元				
後朱雀(一六九六—一七〇五)	(文)	紫式部(？)		
長曆				
長久				
寛德				
一七〇〇				

土佐日記				
大和物語				
後撰和歌集(一六二一)				
天德歌合(一六二〇)				
				初めて和歌所を置く(一六二一)
落窪物語				
				藤原道長關白となる(一六五五)
枕草子				
源氏物語				
紫式部日記				

後冷泉（一七〇五—一七二八）	（歌）藤原公任（一七一）		
永承	（歌）和泉式部（？）		
康平	（歌）赤染衛門（？）		
天喜			
治暦			
後三條（一七二八—一七三二）	（文）大貳三位（？）		
延久			
白河（一七三二—一七四六）	（文）源隆國（一七二七）		
承保			
承暦			
永保			
應德			
堀河（一七四六—一七六七）			
寛治			
嘉保			
永長			
承德			
康和			
長治			
嘉承			
一七五〇			
鳥羽（一七六七—一七八三）	（學）大江匡房（一七一）		
天仁			
天永			
永久			
元永			
保安			
崇德（一七八三—一八〇一）	（歌）源俊頼（？）		
	（歌）藤原基俊（？）		
大治			
天承			
長承			
保延			
永治			
一八〇〇			
近衛（一八〇一—一八一五）			
康治			
天養			
久安			
仁平			
久壽			

新撰髓腦			
和漢朗詠集			
和泉式部日記			
蜻蛉日記			
狹衣			
堤中納言物語			
更級日記			
後拾遺集（一七四六）			
今昔物語			
榮花物語			
高陽院歌合（一七五四）			
堀河後度百首（一七七六）			
金葉集（一七八七）			
大鏡			
詞花集（一八〇四）			

後白河（一八一五—一八一八）	（歌）藤原顯輔（一八一五）		
保元			
二條（一八一八—一八二五）			
平治			
永暦			
應保			
長寛			
永萬			
六條（一八二五—一八二八）			
仁安			
高倉（一八二八—一八四〇）			
嘉應			
承安			
安元			
治承			
安德（一八四〇—一八四五）	（歌）平忠度（一八四七）		
養和			
壽永			
元暦			
後鳥羽（一八四五—一八五八）			
文治			
建久			
一八五〇			
土御門（一八五八—一八七〇）	（歌）西行法師（一八五〇）		
正治			
建仁			
元久	（歌）藤原俊成（一八六四）		
建永			
承元			
順德（一八七〇—一八八一）	（文）鴨長明（一八七六）		
	（歌）源實朝（一八七九）		
建暦			
建保			
承久			
仲恭（一八八一—一八八一）			
後堀河（一八八一—一八九二）	（歌）慈鎭和尚（一八八五）		

取替へばや物語			
保元の亂（一八一六）			
平治の亂（一八一九）			
平氏亡ぶ（一八四五）			
源頼朝幕府を鎌倉に開く（一八四六）			
山家集			
千五百番歌合（一八六一）			
新古今集（一八六五）			
水鏡			
今鏡			
住吉物語			
千載集（一八四七）			
方丈記			
金槐集			
保元物語			
平治物語			
平家物語			
源平盛衰記			

貞應元仁 嘉祿安貞 寛喜貞永			貞永式目(一八九二) 新勅撰集(一八九四)
四條(一八九二—一九〇二) 天福文曆 嘉禎曆仁 延應仁治			
一九〇〇			
後嵯峨(一九〇二—一九〇六) 寛元	(歌)藤原定家(一九〇二)		詠歌大概 東關紀行 撰集抄 宇治拾遺物語 今物語
後深草(一九〇六—一九一九) 寶治建長 康元正嘉 正元			續後撰集(一九一一) 十訓抄(一九一三) 古今著聞集(一九一四)
龜山(一九一九—一九三四) 文應弘長 文永			續古今集(一九二五) 吾妻鑑(一九二七)
後宇多(一九三四—一九四七) 建治弘安	(歌)藤原爲家(一九三五)		續拾遺集(一九三八)
伏見(一九四七—一九五八) 正應永仁	(歌)阿佛尼(一九四三)		十六夜日記
一九五〇			
後伏見(一九五八—一九六一) 正安			中務內侍日記 野守鏡(一九五五)
後二條(一九六一—一九六八) 乾元嘉元	(歌)飛鳥井雅有(一九六一)		新後撰集(一九六三)

昭和五年六月二十三日印刷
昭和五年六月二十六日發行
昭和五年十一月二十二日訂正印刷
昭和五年十一月二十五日訂正發行

國文選(全十册)

定價
自卷一至卷四 各金四拾三錢
自卷五至卷十 各金三拾九錢

昭和六年度臨時定價
自卷一至卷四 各金六拾八錢
自卷五至卷十 各金六拾貳錢

編者 垣內松三
東京市神田區錦町一丁目十番地

發行者 株式會社 明治書院
取締役社長 鈴木友三郎
東京市神田區雉子町三十四番地

印刷者 綾部喜久二

不許複製

發行所 株式會社 明治書院
東京市神田錦町一丁目
(振替東京四九九一番)
電話神田一四一四番

第十一組

竹村篤